博多54

——博多遺跡群第83次調査の概要——

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第503集

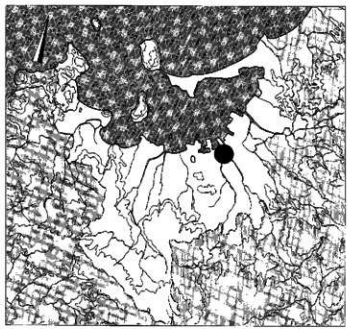
1997

福岡市教育委員会

博多（はかた） 54

――博多遺跡群第83次調査の概要――

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第503集



調査番号　9344
遺跡略号　HKT 83

1997

福岡市教育委員会

図2　A・B区1面全景（南から）

図3　土壙814・822（西から）

はじめに

1．本書は、平成5年度から6年度にかけて福岡市教育委員会がおこなった、博多遺跡群第83次発掘調査の調査報告書である。

2．発掘調査は、隆興株式会社ほかからの文化財保護法57条の2に基づく届出を受け、株式会社大林組からの委託事業として実施した。調査にあたっては、地権者及び工事関係を始めとして関係者各位から種々のご協力とご配慮を頂いた。この場で深く感謝申し上げる。さらに、記録的な渇水と、猛暑のもと、現場作業に従事していただいた作業員の方々にも感謝申し上げる次第である。

3．発掘調査・整理報告は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課埋蔵文化財第一係杉山富雄が担当したほかに、調査現場では、荒牧宏之、佐藤一郎、大塚紀宣の協力に加え、八丁由香の助力を得た。報告書作製にあたっては、米倉秀紀・星野恵美の協力を得た。

4．出土資料、調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、管理し、利用に供する予定である。

凡　例

1）位置の記録には、『博多地区遺跡基準点測量委託測量成果簿（1992）』の成果を利用し、報告上では国土座標(第II系)上の位置と標高とにより表示した。

2）報告中では、遺物、遺構に対して調査中の記録、整理作業に際して付した通し番号により表記した。収蔵に際してもこれを使用する。記録中、遺物注記についても同様である。遺構、遺物であることを明示する必要がある場合は、遺構に対しては記号「M」を、遺物に対しては記号「R」を付している。

3）図中に用いる方位は、国土座標の座標北であり、真北から0度19分西偏している。

4）遺物実測図は、特に記さないかぎり、縮尺3分の1で図示している。その外の縮尺の場合は、遺物番号に続けてそれを付記した。また、遺構実測図は、特に記さないものは縮尺40分の1である。

遺跡調査番号　9344	遺跡略号　HKT-83
調査地地番　博多区奈良屋町32番1・2・3他13	分布地図番号　49（天神）
工事面積　1,326㎡	調査対象面積　1,200㎡
調査実施面積 1,021㎡	調査期間　1993年11月～1994年10月3日

序

商業都市福岡は、その形成に長い歴史的な道筋をたどって今に至っています。そのなかで、中心的な役割を果たしてきた地域が博多です。博多はこんにちも、なおその活動を続けており、その結果として、地下に残っていた過去の活動の跡が埋蔵文化財として日の目を見ることになりました。福岡市教育委員会では、地下鉄工事に先立つ調査をはじめとして、工事によりやむなく破壊される埋蔵文化財については、記録による保存を図ることとし、博多遺跡群についての発掘調査を継続してまいりました。博多第83次調査もそのひとつとつであり、本書においてその成果を公刊することとなりました。

ここに至るまでには、関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。

また、本書が、博多遺跡群についての理解を深めるための資料として些かなりとも貢献するところがあれば幸いです。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　町田英俊

本 文 目 次

第Ⅰ章　博多第83次調査の経過と概要……1
1．発掘調査に至る経過……1
2．発掘調査地点の立地と
周辺の調査地点……1
3．発掘調査の経過……3
4．発掘調査の方法と各区の概要……4
第Ⅱ章　博多第83次調査出土の遺構と遺物…13
井戸58……13
井戸88……14
井戸165……14
井戸705……17
井戸707……19
井戸1053……20
棚182……21
石敷11……24
石敷201……26
石敷713……26
石敷811……27
石敷225……28
石組壙10……29
石組壙20……30
石組壙30……31
石組壙35……31
石組壙70……32
石組壙87……33
石組壙100……33
石組壙101……35
石組壙105……36
石組壙125……37
石組壙128……37
石組壙154……38
石組壙167……38
石組壙168……39
石組壙169……40
石組壙170……40
石組壙183……41
石組壙184……41
石組壙242……42
石組壙243……42
石組壙681……43
石組壙781……44
石組壙815……45
石組壙956……48
礎石37……48
遺構209・石組壙120……50
石組909……53
炉74……54
土器埋甕117……54
土器埋甕256……55
土器埋甕825……55
土壙18……56
土壙19……57
土壙32……58
土壙104……59
土壙130……62
土壙814……62
土壙822……63
井戸227……65
井戸344……65
井戸346……65
井戸370……65
井戸396……67
棚238……68
溝283……69
石組244……70
石組245……73
石組487……73
遺構358……74
土壙354……77
土壙355……77
土壙386……78
土壙502……78
井戸596……80
井戸598……80

井戸600 ……81
井戸640 ……81
井戸1050……82
井戸1051……82
井戸1052……83
土器埋置679 ……84
土壙352 ……85
土壙400 ……85
土壙407 ……86
土壙479 ……86
土壙499 ……86
土壙500 ……87
土壙503 ……87
土壙513 ……88
土壙582 ……88
土壙595 ……89
土壙608 ……89
土壙618 ……89
土壙729 ……91
土壙782 ……91
土壙839 ……92
土壙910 ……93
土壙1012……93
遺構1079……94
土壙1080……94
第Ⅲ章　おわりに……97

図 目 次

図 1 博多遺跡群の位置
図 2 A・B区１面全景（南から）……巻頭
図 3 下城814・822（西から）……巻頭
図 4 博多遺跡群の位置（1:50,000）……1
図 5 東半部１面全景（南から）……2
図 6 東半部石造遺構（南から）……2
図 7 博多第83次地点調査区の位置
（1:4,000）……3
図 8 博多第83次地点調査区設定図
（1:1,000）……3
図 9 第１調査面全体遺構実測図１
（1:200）……4
図 10 第１調査面全体遺構実測図２
（1:200）……5
図 11 第２調査面全体遺構実測図
（1:200）……5
図 12 第３調査面全体遺構実測図１
（1:200）……6
図 13 第３調査面全体遺構実測図２
（1:200）……7
図 14 A区第３調査面全景
（西から）……8
図 15 B区第３調査面全景（南から）……8
図 16 C区第１面の調査（北から）……9
図 17 D区南壁（北から）……9
図 18 E区第１調査面（南から）……10
図 19 E区第１調査面（西から）……10
図 20 E区第３調査面（南から）……10
図 21 F区第１調査面（東から）……11
図 22 F区第３調査面東半部（東から）…11
図 23 F区第３調査面西半部（東から）…11
図 24 F区第１調査面東半部（南から）…12
図 25 F区第１調査面西半部（東から）…12
図 26 井戸58実測図（1:40）……13
図 27 井戸58（北から）……13
図 28 井戸88実測図……14
図 29 井戸88
上 完掘（北から）
下 下底部の構造（東から）……14
図 30 井戸165実測図……15
図 31 遺構58・88・165出土遺物……16
図 32 井戸705実測図（1:40）……17
図 33 井戸705
上 全体（北から）
下 下底部（南から）……18
図 34 井戸705出土遺物……18
図 35 井戸707実測図（1:60）……19
図 36 井戸707（北から）……19
図 37 井戸1053実測図……20
図 38 井戸1053下部（南から）……20
図 39 棚182実測図……21
図 40 棚182（南から）……21
図 41 石敷11・255実測図……22
図 42 石敷11掘型実測図……23
図 43 石敷11・224（南から）……23
図 44 石敷11
上 石敷11・12（北から）
中 石敷断面（東から）
下 石敷掘型（南から）……24
図 45 遺構707・1053・182・11・出土遺物 …25
図 46 石敷201・713・811実測図（1:80） …26
図 47 石敷201・713・811
断面実測図（1:40）……26
図 48 石敷209（南から）……26
図 49 石敷713・811
上 713（西から）
下 石敷811（南から）……27
図 50 石敷201出土遺物……27
図 51 石敷225
上 列石部分（北から）
下 間 断面（北から）……28
図 52 石敷225出土遺物……28
図 53 石組壇10実測図（1:40）……29
図 54 石組壇10（北から）……29
図 55 石組壇10出土遺物……29
図 56 石組壇20実測図……30
図 57 石組壇20（南から）……30
図 58 石組壇20出土遺物……30
図 59 石組壇30実測図……31
図 60 石組壇30（南から）……31
図 61 石組壇30出土遺物……31
図 62 石組壇35実測図……31
図 63 石組壇35（南から）……31
図 64 石組壇35出土遺物……31
図 65 石組壇70実測図（1:40）……32
図 66 石組壇70……32
図 67 石組壇70出土遺物……32
図 68 石組壇87実測図……33
図 69 石組壇87（南から）……33
図 70 石組壇87出土遺物……33
図 71 石組壇100実測図……33
図 72 石組壇100（東から）……34
図 73 石組壇100出土遺物……34
図 74 石組壇101実測図（1:40）……34
図 75 石組壇101
上 壇内礫出土状況（北から）
下 完掘状況……35
図 76 石組壇101出土遺物……35
図 77 石組壇105実測図（1:40）……36
図 78 石組壇105（西から）……36
図 79 石組壇105出土遺物……36
図 80 石組壇125実測図……37
図 81 石組壇（東から）……37
図 82 石組壇128実測図……37
図 83 石組壇128（北から）……37
図 84 石組壇154実測図……38
図 85 石組壇154（東から）……38
図 86 石組壇167実測図……38
図 87 石組壇167（東から）……38
図 88 石組壇168実測図……39
図 89 石組壇168・169・170（南から）……39
図 90 石組壇169実測図……40
図 91 石組壇168（東から）……40
図 92 石組壇170実測図……40
図 93 石組壇183実測図……41
図 94 石組壇183（西から）……41
図 95 石組壇184実測図……41
図 96 石組壇184（東から）……41
図 97 石組壇242実測図……42
図 98 石組壇242（北から）……42
図 99 石組壇243実測図……42
図100 石組壇243（南から）……42
図101 石組壇681実測図……43
図102 石組壇681（北から）……43
図103 石組壇701実測図……43
図104 石組壇701（東から）……43
図105 石組壇701出土遺物……43
図106 石組壇781実測図……44
図107 石組壇781（南から）……44
図108 石組壇781出土遺物……44
図109 石組壇815実測図……45
図110 石組壇815
上 土層断面（北から）
下 壇内礫出土状況（南から）…45
図111 石組壇出土遺物
（125・167・168・169・170・183）……46

図112 石組墳出土遺物
(184・242・681・815)……47
図113 石組墳956実測図……48
図114 石組墳956（東から）……48
図115 礎石37実測図……48
図116 礎石37（南から）……48
図117 石敷209・石組墳120実測図……49
図118 遺構209・石組墳120
上 南から
下 東から……50
図119 遺構209・石組墳120（北から）……51
図120 遺構209・石組墳120周囲の礫群
（東から）……51
図121 遺構209・石組墳120周囲の断面
（南から）……51
図122 遺構出土遺物（956・37・209・120）……52
図123 石組909実測図（1:40）……53
図124 石組909出土遺物実測図……53
図125 石組909
上 全景（東から）
下 覆土断面図……53
図126 炉74実測図……54
図127 炉74（南から）……54
図128 土器埋置117実測図……54
図129 土器埋置117出土遺物実測図……54
図130 土器埋置117（南から）……54
図131 土器埋置256実測図……55
図132 土器埋置256（西から）……55
図133 土器埋置256出土遺物実測図……55
図134 土器埋置825実測図……55
図135 土器埋置825（南から）……55
図136 土壙18実測図……56
図137 土壙18
上 南から
下 土層断面（西から）……56
図138 土壙19実測図……57
図139 土壙19（東から）……57
図140 土壙19出土遺物……57
図141 土壙32実測図……58
図142 土壙32（南から）……58
図143 土壙32出土遺物実測図……58
図144 土壙104実測図……59
図145 土壙104（南から）……59
図146 土壙104出土遺物……59
図147 遺構出土遺物（825・18・32・104）……60
図148 遺構出土遺物（18・32・130）……61
図149 土壙130実測図……62
図150 土壙130（北から）……62
図151 遺構814・822実測図……62
図152 遺構814・822
上 814・822（北から）
中 814（東から）
下 822（北から）……63
図153 遺構出土遺物（814・822）……64
図154 井戸227・344・346・370実測図
(1:60)……65
図155 井戸277・344・346・370
確認情況（北から）……66
図156 井戸277・344・346・370
掘りあげ状況（南から）……66
図157 井戸出土遺物（227・344・346）……67
図158 井戸396実測図……67
図159 井戸396（北から）……67
図160 井戸396出土遺物……67
図161 柵238・溝283実測図……68
図162 柵238出土遺物……68
図163 柵238土層断面（南から）……69
図164 遺構出土遺物（283・244・245）……69
図165 石組244実測図……70
図166 石組244全景（南から）……70
図167 石組244出土遺物実測図……71
図168 石組244
上 南辺部の状況（南から）
下 南西隅部の状況（北から）…71
図169 石組244北辺部（北から）……72
図170 石組244北辺部（西から）……72
図171 石組244北辺部断面（東から）……72
図172 石組245実測図……73
図173 石組245（西から）……73
図174 石組487実測図……73
図175 石組487（西から）……73
図176 遺構358実測図……74
図177 遺構358（南から）……74
図178 遺構358下面検出状況（西から）…75
図179 遺構358下面掘りあげ後（西から）75
図180 遺構358下面
上 灰層（北から）
中 灰層除去後（東から）
下 焼け面（東から）……76
図181 土壙354実測図……77
図182 土壙354（南から）……77
図183 土壙355実測図……77
図184 土壙355（南から）……77
図185 土壙386実測図……78
図186 土壙386（西から）……78
図187 土壙502実測図……78
図188 土壙502（北から）……78
図189 遺構出土遺物
(358・354・355・386・502)……79
図190 井戸596・598実測図（1:40）……80
図191 井戸596・598出土遺物……80
図192 井戸596・598（北から）……80
図193 井戸596出土遺物(2)……81
図194 井戸600（北から）……81
図195 井戸640（北から）……81
図196 井戸（600・640）出土遺物……82
図197 井戸640実測図……82
図198 井戸1050・1051・1052実測図……83
図199 土器埋置679実測図……84
図200 土器埋置（東から）……84
図201 土器埋置679出土遺物……84
図202 土壙352実測図……85
図203 土壙352出土遺物……85
図204 土壙400実測図……85
図205 土壙400（南から）……85
図206 土壙407実測図……86
図207 土壙479実測図……86
図208 土壙407・479出土遺物……86
図209 土壙499実測図……86
図210 土壙500実測図……87
図211 土壙500（西から）……87
図212 土壙503実測図……87
図213 土壙503（北から）……87
図214 土壙513実測図……88
図215 土壙513（西から）……88
図216 土壙582実測図……88
図217 土壙582（西から）……88
図218 土壙595実測図……89
図219 土壙608（東から）……89
図220 土壙608実測図……89
図221 土壙618実測図……89
図222 土壙 499・500・503・513・582・
595・618出土遺物 ……90
図223 土壙729実測図……91
図224 土壙729出土遺物……91
図225 土壙782実測図……91
図226 土壙782（東から）……91
図227 土壙782出土遺物……92
図228 土壙639（東から）……92
図229 土壙639出土遺物……92
図230 土壙910実測図……93
図231 土壙910出土遺物……93
図232 土壙1012実測図……93
図233 土壙1012出土遺物……93
図234 土壙1080実測図……94
図235 遺構 1050・1079出土遺物……94
図236 遺構出土遺物……95
図237 調査区土層断面図……96
図238 石造遺構と柵（1:500）……97

第Ⅰ章　博多第83次調査の経過と概要

Ⅰ-1　発掘調査に至る経過

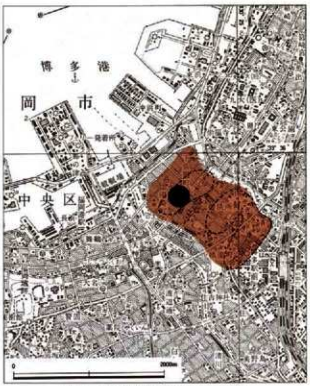


図4　博多遺跡群の位置（1:50,000）

埋蔵文化財事前審査　1992年4月8日付で隆興株式会社より、博多区奈良屋町29-1外地について福岡市教育委員会に埋蔵文化財事前審査の申請があり、これを受けて埋蔵文化財課では、事前審査班の手により現地の試掘調査を同年5月12日実施した。試掘調査では申請地中央に1条の試掘溝を掘削した。結果として中近世の遺物の出土をみた。続けて、隣地についても事前審査の申請を受け、これについても試掘調査を実施し、埋蔵文化財を確認した。以上のような結果をもとに申請者と埋蔵文化財課とで協議を重ねた。

1993年に至り、隣地も併せた工事計画が確定し、隆興株式会社他2者から文化財保護法57条ノ2による届け出を受けて、当該地の発掘調査を「福岡市博多区奈良屋町29-1外地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査」とし、委託者を株式会社大林組、受託者を福岡市教育委員会とした委託契約を締結した。発掘調査は教育委員会文化財部埋蔵文化財課が担当することとなった。この契約により調査期間は、1993年11月1日から1994年8月31までとされた。

Ⅰ-2　発掘調査地点の立地と周辺の調査地点

発掘調査は、博多遺跡群の第83次調査として実施することとなった(以下、第83次地点と呼称する)。

博多遺跡群は博多湾奥部に発達した砂丘列上に立地する。砂丘列は大きく3列が認められており、第83次地点はそれの最も海側の砂丘「息浜」と呼ぶ砂丘列上に立地することになる。現況の等高線によれば、現在の昭和通りが尾根線をなしており、第83次地点は、それに接して北側の位置を占めることになる。「息浜」の陸化の過程についての考察によれば、本地点は11世紀末には海岸線近くの海中であり、13世紀末頃に海岸線付近の陸という位置にあったとされている。それより、やや先立って「息浜」は、博多の一部として機能しはじめており、その後、室町時代以降、博多における活動の中心的場所としての地位を固めていったと考えられている。

「息浜」部でのこれまでの調査は、本次調査を含めて1996(平成8)年度までで13地点に及んでいる。隣接する第75次地点では、16世紀末以降の遺構が調査されている。昭和通りを隔てて「息浜」の陸側の斜面に立地する第42次、60次地点では12世紀以降、継続した利用がおこなわれたことが確認されている。本地点の西方では、第55次地点で14世紀から15世紀には井戸、建物などが調査されている。この地点に近接して西方の第68次地点では元寇防塁と推測される遺構が調査されている。本地点から東

図5　東半部1面全景（南から）

図6　東半部石造遺構（南から）

北方向にやや離れた第82次地点では、15世紀以降に活動の痕跡が認められている。

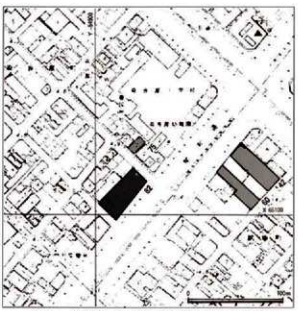


図7　博多第83次地点遺跡の位置（1:40,000）

Ⅰ-3　発掘調査の経過

前述の経過を受けて、1993(平成5)年11月1日から先ず、表土の働き取りに着手した。働き取りには委託者から機械の提供を受けた。試掘結果などをもとに当初、地表下1.7mまでを働き取ることとしたが、現場での作業中に立会した結果、1.4ないし1.5mの位置から遺構が検出できることが判り、この位置までの働き取りとし、以下は人力による調査とすることに変更した。表土の働き取りは出入口の部分を除いた区域についておこなった。

調査は、対象地東側から着手した。東半部では既存の土留工が施工済であったので、その壁を単位にA区、B区を設定した。土留工の西にC区を設定した。実際の調査は、掘り下げと記録とを平行させることが必要なため2区画以上での調査を平行することになった。

また、調査による廃土は、場内での処理としたこと、調査終了部の一部を工事の準備に使用する必要が生じたために、西半部も更に細分して調査区を設定し、結果としてF区までを設定、調査を行なった。但し、出入口部は機材の搬入等の作業上調査が不可能であった(図5)。

以上のような、細分した調査区での調査が必要となったことと、報告するような、石造の遺構が予

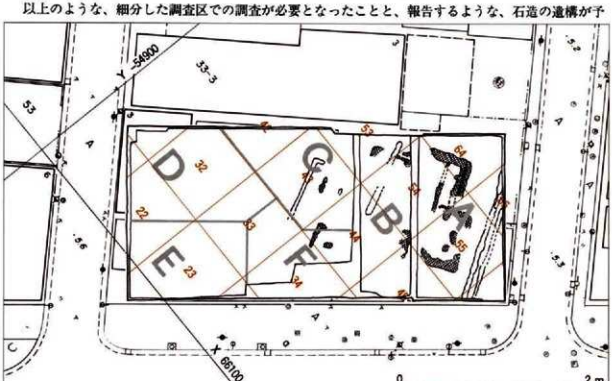


図8　博多第83次地点調査区設定図（1:1,000）

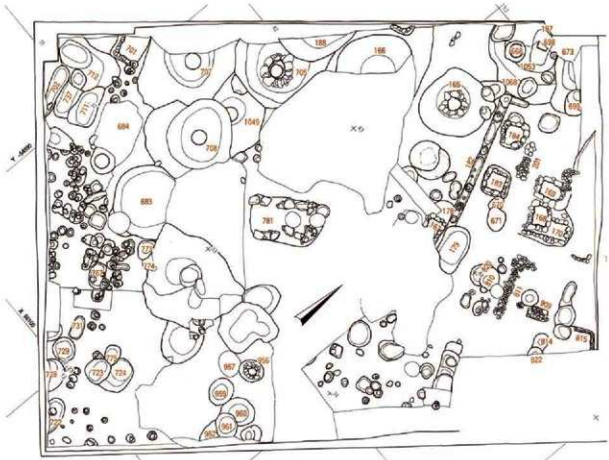


図8　第1調査面全体遺構実測図1

想以上に遺存していたことなどの要因が重なり、結果として調査期間の延長が必要となったが、地権者および委託者の協力を得、期間を約1ヶ月延長し、現場の撤収は10月3日となった。

Ⅰ-4　発掘調査の方法と各区の概要

基準線の設定　実際の調査の平面上の区分は上述のとおり、A区からF区までを設定したが、加えて記録のために国土座標に合わせて格子区を設定した。基準点は調査用基準点として既設の「博多地区遺跡基準点(1992年3月)」を利用した。座標の値により、10mを区切り、これを基準の格子とした。さらにこれに100m格子のなかでの場合の番号を付した。具体的には、X軸の正方向の10m区切りの順番と、Y軸方向に同様の順番とを組み合わせて2桁の数字とし、これを各区の番号とした。結果として本調査地点は12区から65区までの調査区に含まれることになった。高さは標高で表示した。

第83次地点の層序と調査面　表土は外壁の土留工一杯に掘り取ったので、表土の状況は掘り取り時の観察による。調査区東端部では、表土下0.4mの位置に焼土層が認められた。これを挟んで地表下0.8mの位置までは黒褐色シルト層で、木炭、灰を顕著に含んでいる。焼土層を2層とし、上下をそれぞれ1層、3層とした。2層は、位置関係から戦災によるものかと考えられる。4層は表土下1.3mの位置までの厚さをもっている。粘質の暗褐色ないし乃黒褐色の砂層で、粗粒砂を顕著に含んでいる。表土掘り取り時の立ち会いではこれを除去した位置で石造の遺構を確認したので、第1面として調査を行なった。この面は、調査区内でも、場所により高低があり、調査区南西隅部では、地表下1.0m

図10　第１調査面全体遺構実測図２（1:200）

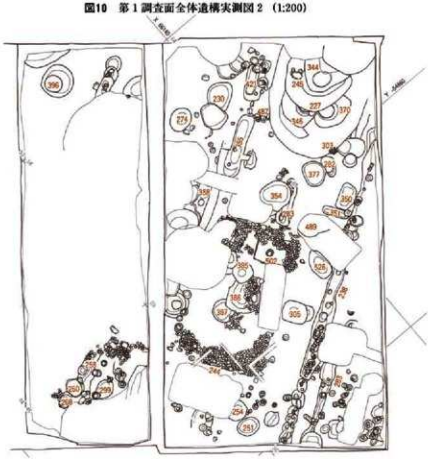


図11　第２調査面全体遺構実測図（1:200）

図12　第３調査面全体遺構実測図１

で下位の層に至る。４層までは調査区内全体に広がっているが、５層とする層は、部分的にしか確認できなかった。黒色の砂層、焼土層、暗灰黄色のシルト混りの砂層等の互層が縞状を呈する層で、平面的な調査の対象とできたのはA区のほぼ全体とB区の一部である。この部分で５層以下の遺構について第２面を設定、調査をおこなった。これ以外の、D区でも土層観察用に残した畦の断面で、５層が断続することは確認したが、平面での広がりとして捉えることができず、調査の対象とはならなかった。５層下の黒褐色砂層のうち、上位の、粘質の強い粗砂混りの部層を６層とした。A区を中心とした部分的な広がりと観察された。下位の粗砂混りの軟質の部層を７層とした。７層が第83次調査地点の調査区全域で地山直上となる層である（図237）。C区、F区以西では、調査第１面はこれの上面である。７層を除去した地山面を第３面の調査面とした。

各調査区の概要　以上の様な層序と調査面との関係から、調査区内でも各区毎に状況が異なるので、以下にA区以下、F区までの各区毎の概要を記す。

A区の概要　土留工により区画された東端の調査区である。第２面を挟んで３面での調査を行なった。第１面では石組壊、石敷等の石造遺構が顕著で、調査も、最も時間を要した。これらの遺構は、全体として方向に一定の規則性を持つように見て取れる。第２面では５層で埋め込まれたような状態で石造の遺構が遺存していた。また、これと関連をもつような状態で鋳造関連の施設の可能性のある遺構を調査した。調査区を斜めに横断する溝もこの面からの調査である。北端部の井戸は、第１面に掘り込み面をもっていた可能性が残る。第３面では、多数の土壌、柱穴を調査した。明確にそれと判る土壌と、土層断面図で見るように不整な掘り込みの下半部の遺存部分とみえるものとがある。個別

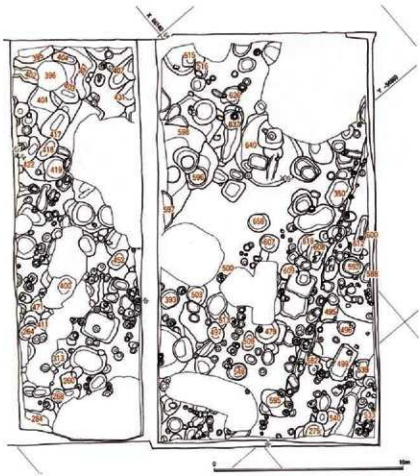


図13　第３調査面全体遺構実測図２（1:200）

遺構の項では触れないが、鉄滓を出土する遺構が顕著である。地山砂層と識別の難しい覆土の遺構が複数あり、本地点の恒常的な利用の開始の状況を示す遺構と考えられる。

Ｂ区の概要　東西両側の土留工を区画とした調査区である。第１面ではＡ区と同様石造遺構が顕著であるほかに井戸も大きな面積を占める。このこともあって、第２面の調査は部分的なものとなった。第３面はＡ区と似たような状況を示すが、鉄滓の出土量は顕著ではない。

Ｃ区の概要　中央部北半の調査区である。第１面では、石造の遺構の他に井戸の分布が顕著である。井戸は調査区の北半部に重複して群集する。Ａ区の柵と関連を持つように柵がある。第２面は確認できず、調査面としては２面の調査となった。第３面では、土壙、柱穴を始めとして多数の小穴を調査した。

Ｄ区の概要　西端北半部の調査区である。調査第２面は確認できず、２面での調査となったが、これも判断が難しいものがある。調査区の北側の大半は井戸が占める。西端に寄って土壙、柱穴、小穴等を確認、調査した。東部分は近代の塵穴で大きく撹乱を受けている。西端部の土壙は一定の方向を示すことが顕著である。

Ｅ区の概要　西端南半部の調査区である。東部分は撹乱が顕著である。第１面と第３面での調査となった。第１面の遺構はさほど多くない。柱穴列が注意される。第３面は土壙、柱穴、小穴が密集して検出された。柱穴と考えられる、底部に礫を敷いた小穴が顕著に分布する。

Ｆ区の概要　出入口に接して引きを取ったので不整な形状の調査区となった。第１面と第３面として調査を行なった。第１面では石造の遺構が分布している。第１面下に埋め込まれたようなあり方が注意される石造の遺構がある。第３面では、他区と同様土壙、柱穴、小穴が多数検出された。

図14　A区第3調査面全景（西から）

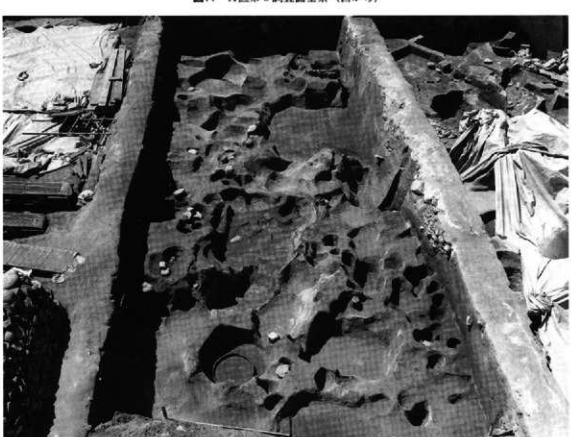


図15　B区第3調査面全景（南から）

図18　C区第1面の調査（北から）

図17　D区南壁（北から）

図18　E区第1調査面（南から）

図19　E区第1調査面（西から）

図20　E区第3調査面（南から）

図21　F区第1調査面（東から）

図22　F区第3調査面東半部（東から）

図23　F区第3調査面西半部（東から）

図24　F区第1調査面東半部（南から）

図25　F区第1調査面西半部（東から）

第Ⅱ章　博多第83次調査出土遺構と遺物

以下に個別遺構と遺構出土遺物を報告する。

報告は調査面毎に、かつ種別ごとに掲載している。遺構種別は、概ね、井戸、溝、柵、石敷、石組壙、礎石、土器埋置遺構、土壙の順とした。

Ⅱ-1　1面検出の遺構

井戸58

A-64区に位置する。石組の井戸側が遺存している。構築材は、確認面から0.5m間での部分では出土せず、井戸側内から出土した礫が出土しているので、埋立に際してこの部分まで破壊、投棄されたのかもしれない。調査区外壁となる土留工事により半ば近くを破壊されている。井戸側構築部材は、砂岩のほかに花崗岩等も含まれている。枕大を中心とした大きさの石材の小口面を揃えるような形で、平面形が径1m程の円形を呈するように組み上げている。掘型は、重複して古い井戸覆土に掘り込んでいるため不明瞭であり、周囲の掘り下げ時の観察からするかぎり大きく鉢形に開く形状のものではない。外壁際であることから安全を考えて完掘に至っていない。井戸側の検出位置は標高3.5m、掘り下げは標高2.1mの位置までである。

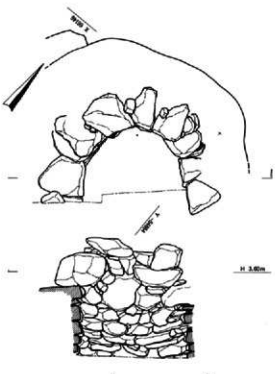


図26　井戸58実測図（1:40）

図27　井戸58（北から）

出土遺物　出土遺物を図31に示す。遺物は覆土中から散漫に出土した。総量は、コンテナ1 1/2程の分量である。瓦が混り、殆どが細片ないし小破片の資料である。2365・2364は糸切底の土師器、2366・2367は肥前系の陶器であろうか。2367は内底面の釉を輪状に掻き取る。2366・2369は同じく染付である。2369脚部下半は露釉である。2370は備前系の甕で、自然釉の掛かった肩部に、篦状の工具により「二石」と刻んでいる。

井戸88

B-53区に位置する。平面形状は井戸と同様であるが、底面が他の井戸と比べはるかに高い位置にあり、その標高3.5mである。井戸側に相当する部分は瓦で構築されており、底面にはそれを受ける掌大の偏平な石材が配されている（図29下）。使用する瓦は、通常の井戸と変わらず厚手のそれである。掘型の径3.4m、井戸側相当部分の内径は、1.6mを測る。底面は僅かに窪んでいる程度で、掘り下げ時の観察からすると、帯水の痕跡等は認められなかった。

出土遺物　遺物は少量出土している。出土遺物を図31に示す。遺物の半ばは瓦の細片で、桟瓦とみられる資料を含んでいる。被熱によるものか、赤化した資料もある。残りは、陶磁器と土師器が半ばする。何れも小破片あるいは細片の資料である。糸切底の土師器（2371～2373）は口径が7cmを前後する資料と9cm余りの資料とがある。2376・2374は陶器である。2374の内底面と対応する高台畳付には目痕が残る。2375は染付碗である。内底面の釉は輪状に掻き取られている。

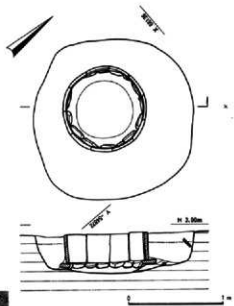


図28　井戸88実測図

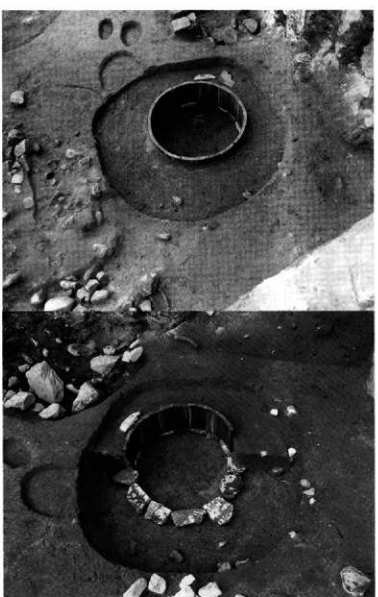


図29　井戸88　上　完掘（北から）　下　下底部の構造（東から）

井戸165

C-43区に位置する。擂鉢状の掘型をもつ石組の井戸である。確認面では、長径が4.1m程の楕円形状を呈する。井戸側の上部は破壊、恐らく抜き取られており、井戸側の石組は調査面からの深さ1mの位置から下の部分が遺存している。北に接してある土壙状の窪み696はあるいはこれの抜取り作業に伴うものかもしれない。石組の構築材はおもに枕大以上の大きさの礫を使用している。

石組下底部直下で木製の井戸側を検出した。材は腐朽して痕跡を残すのみである。桶形のものと思われる。この部分から0.1m下位の標高0.5mの位置で湧水点となり、以下の調査は中止した。

出土遺物　遺物は多く上半部の抜き取り跡から出土している。総量でコンテナ2/3程の分量となる。瓦類が1/4を占める。土器類は何れも細片あるいは小破片の資料である。2377～2379は糸切底の土師器である。2382は明染付の碗、2380は黒色釉の瓶口縁部、2381は褐色釉の陶器で耳付きの壷である。2383は唐草文の軒平瓦細片資料である。

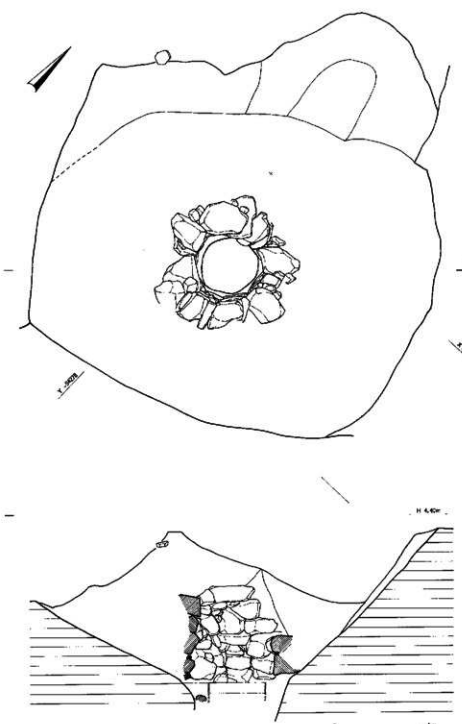


図30　井戸165実測図（1:40）

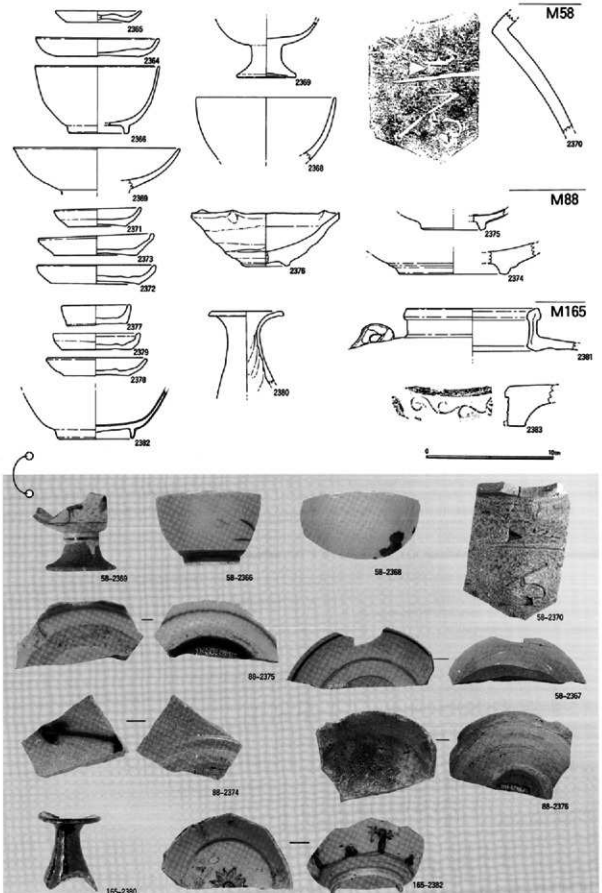


図31　遺構58・88・165出土遺物

井戸705

D-32区に位置する。32区を中心とした部分には井戸が密集、重複している。このうち、調査区内で最も西に位置する井戸である。平面形状は不整な楕円形状を呈し、井戸706、井戸708と重複してそれらよりも古く、井戸1049と重複してそれよりも新しい遺構であると、半面では観察された。確認面での規模は、長さ5.1m、幅3.4m程である。遺構確認面直下から石組の井戸側が遺存していた。石組に使用する石材は、枕大以上の大きさのものを主としてその小口面を0.8乃至0.9m程の円に沿って組み合わせて井戸側としている。石組の下底は確認面から2.4m、標高0.7mの位置となる。そして、標

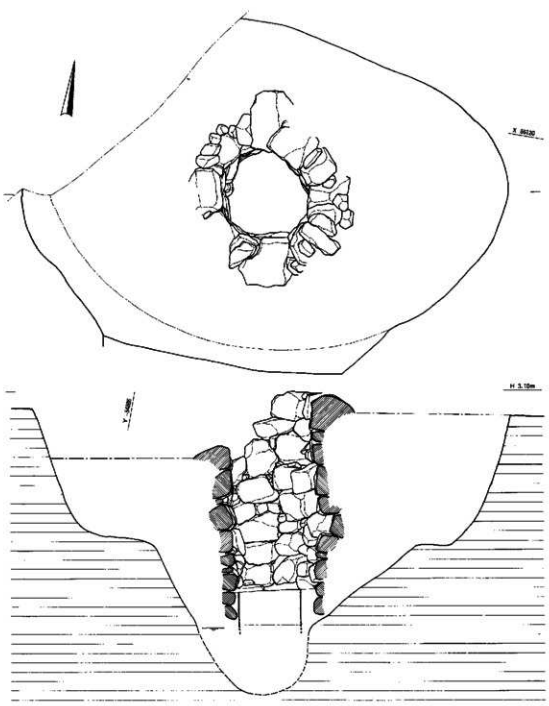


図32　井戸705実測図（1:40）

高0.8mの位置から下位にはこれの内側に木製の井戸側を確認した。木質は腐朽して痕跡のみとなり、構造は不明であるが、桶形で、2段に重なっているように見て取れた。また、井戸掘型をみると標高1.5m程の位置で一段の段があり、それ以下は擂鉢状に急にすぼまっている。標高0.5mの位置に湧水点があり、それ以下の掘り下げは不可能であった。

出土遺物　遺物は上部覆土を中心にコンテナにして2/3程の分量が出土した。図示しないが土師質の箱形の容器資料が1/3を占めるほかに瓦の資料がかなり含まれる。土器、陶磁器の資料は上記の他は細片あるいは小破片の資料を主としている。2387・2384は肥前系染付である。2384は碗を復原できよう。2386・2385は陶器碗、2388は皿であろうか。釉は白濁し不均質である。2386では剥落している。2385の内底面とそれに対応する高台畳付には目痕が残されている。

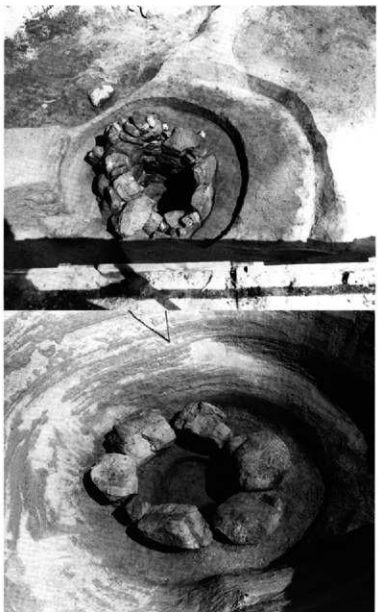
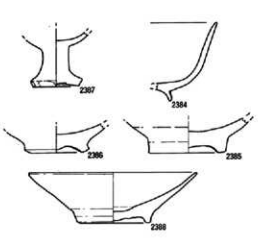


図33　井戸705　上　全体（北から）
下　下底部（南から）



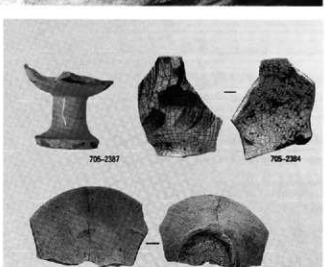


図34　井戸705出土遺物

井戸707

井戸705と重複してD-32区に位置する。上述のとおり、確認面での観察では井戸705より古いものとできる。

一部が調査区を外れているが、平面形は不整な楕円形状を呈するものであろう。現状でその長径6.0m、短径3.5m前後とできる。覆土は暗褐色の有機物混りの粘質のある砂である。掘り下げ途中で覆土の変化により井戸側の残ったままで埋め立てられたことがわかった。さらに、標高0.7mの位置では木製の井戸側が遺存していることを確認した。ただし、木質は腐朽し、痕跡程度の依存状態である。従ってそれ以上の細部の観察はできなかった。井戸掘型の断面形状をみると擂鉢状を呈するが、標高1.5mのあたりでその傾斜が変化して下位の傾斜が急になっていることがわかる。

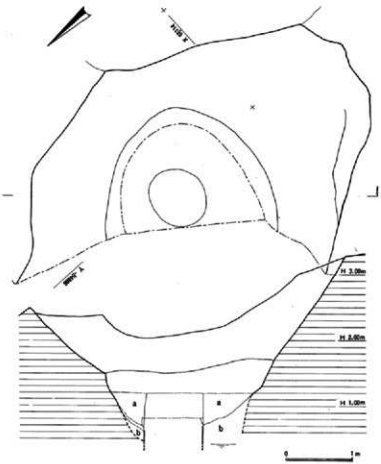


図35　井戸707実測図（1:60）

出土遺物　遺物は掘型覆土から主として出土した。総量でコンテナ2/3程の分量である。井戸707出土遺物を図45に示す。2389～2391は糸切底の土師器である。2391の口径7.0cm、2390の口径12.9cm、2389の口径12.1cmをそれぞれ測る。2390・2391の内底面には横方向の撫で調整、2390の外底面には板目が観察される。2392～2394は青磁である。2392は口縁部の細片資料で、その内面、2393も同様資料で、内外面に象嵌がおこなわれる。2394は底部の大破片で、内底面中央には、工具による「風」字銘が刻まれている。

図36　井戸707（北から）

井戸1053

C-53区に位置する。平面形状は半ば以上が調査区外に位置するために判然としないが、不整な円形状を呈するものと推測できる。

本遺構は、調査開始時点では、黒色の河原石の集積をもつ不整な楕円形状の遺構197として考えていたが、調査の進行に伴い、より大きな井戸状の遺構であることが判明したものである。調査区外壁にかかっていることで下底部まで掘り下げることができなかったが、下部では方形または長方形になる枠の痕跡を確認した。枠自体は木製と思われ全く遺存していない。また、1068とするのは、調査区壁面での観察から、重複して古い遺構とできる。内部の枠は調査部分の上半部で崩落している。枠内部の覆土は砂、粘質土等のレンズ状の堆積であり、人為的な埋立は考えられない。ある時点まで空間として残っていたものかもしれない。ここで、平面図上での検討から、この枠の直上に遺構197の礫集積が位置していることがわかる。これと遺構197の形状の不整なこととを考え合わせると、遺構1053の覆土に関連して設けられたものであると考えられる。

出土遺物　上述のような理由から他遺構と区分しないで取り上げた遺物がかなりの量あると考えられ、本遺構としていま確実な資料は少量である。2396は陶器碗、2395は陶器擂鉢である。後者は内外面とも褐色の釉がかかっている。

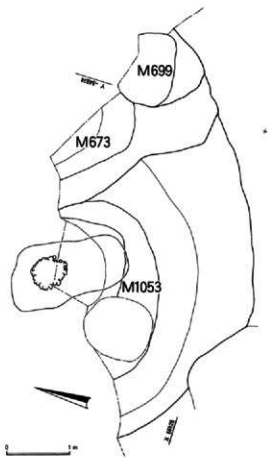


図37　井戸1053実測図（1:60）

図38　井戸1053下部（南から）

柵182

C-43区に位置する。確認面では溝状を呈する。覆土は黒褐色で粘質のある砂で全体に一様である。掘り上げると柱穴の根固めと同様礫が並んだ状態が認められる。底面も小穴が並んだような状態を示しているが、調査途中では相互の重複関係を捉えることはできなかった。北端が調査区の途中で終わる。端部は東に折れて終わる。底面に置かれた礫は、立てられた柱あるいは杭の下底部を調整するかのように重ねられている例もみられる。布掘り状の掘型の中に柱を建てていく事とともに、順次柱を更新していったことも考えられよう。遺構の幅0.4m、深さは0.5mを測る。

出土遺物　覆土中から少量が出土した。図45に示す。1/3が糸切底土師器の細片である。2414・2414はいずれも細片の資料であるが、明染付碗であろうか。2413は白磁碗の細片資料である。2411は瓦質の火鉢である。

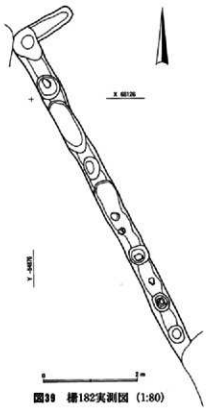


図39　柵182実測図（1:80）

図40　柵182（南から）

図41　石敷11・255実測図（1:80,1:40）

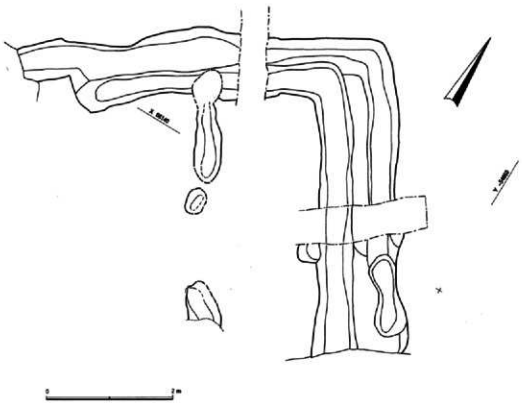


図42　石敷11掘型実測図（1:60）

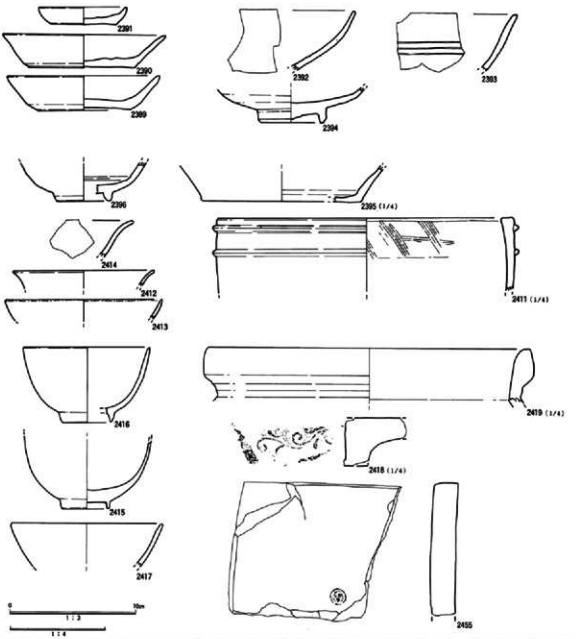
図43　石敷11・224（南から）

石敷11

A-64及び54区に位置する。石組遺構10と重複し、それよりも古い。現状でほぼ直角に折れる「く」の字形を呈す。溝状の掘型に拳大前後の礫を詰め、出土時の状況から、やや盛り上げたような状態を呈している部分がある。平面形状は二股に分かれているが、掘型は別に掘削され、礫の重なりの観察からも前後関係が判る。屈曲する内側の列のほうが新しく掘削、構築されたものと観察される。礫の広がりの範囲は一定しないが、ほぼ0.7mを前後する。掘型の幅は0.5m、深さは0.3mほどの規模である。礫が掘型を越えて広く置かれている。本遺構の両端は他遺構と重複しているが、掘型もほぼその部分で終わり、出土時の形状でほぼ完結するもののようである。礫間には空隙が残り、そこに浸水による泥の堆積を生じているような部分もある。屈折部も鋭角には折れず、丸みをもっており、建造物の基礎などの機能には不足であるような点が顕著である。このまま地下に埋め込まれることで機能したものである可能性も残っている。

出土遺物　礫間、礫状をまとめてコンテナ1程の量が出土している。その2/3の分量は瓦が占めている。全て細片の資料である。2416～2417は染付碗の資料である。何れも肥前系の磁器である。2419は備前系甕の口縁部細片資料である。2418は軒平瓦、2455は印文のある平瓦である。

図44　石敷　上　石敷11・12（北から）
中　石敷11断面（東から）
下　石敷11掘型（南から）



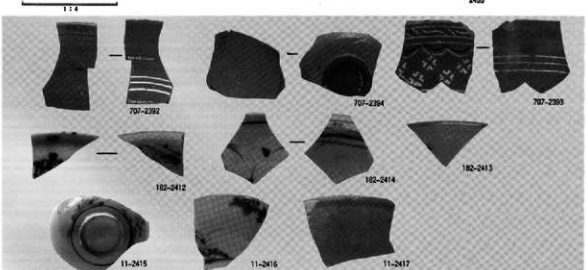


図45　遺構707・1053・182・11・出土遺物

石敷201

C-43区に位置する。細長い土壙状の掘型の南側では掌大前後の礫を、北半部では小児頭大の礫をそれぞれ詰めている。その範囲は長さ2.1m、幅0,6mとなる。東側に平行して、2m余りの距離の位置に同様な石敷がある。西側の礫群の主軸の方向は北33度33分を測る。

出土遺物　遺物は少量が礫間から出土している。図50に示す。糸切底土師器の細片あるいは小破片の資料が半ばを占める。特に皿形土器が顕著である、そのほかに陶磁器、瓦質の土器が含まれている。2457は糸切底の土師器である。2456は青磁碗である。2458は陶器皿である。

石敷713

C-44区に位置する。石組壙170と重複してそれよりも古い。長さ1.5m、幅0.7mの掘型へ礫を詰めている。状半部は石組壙170により破壊され

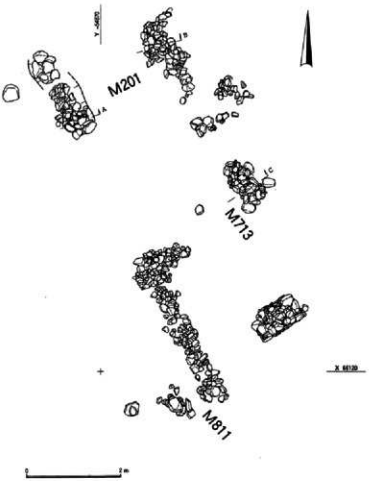


図46　石敷201・713・811実測図（1:80）

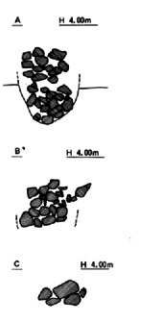


図47　石敷201・713・811断面実測図（1:40）

図48　石敷209（南から）

て削除されてしまっているものと思われる。

出土遺物　掘型埋土、礫間からも土器類の出土はなかったが、台石、砥石といった石製品が出土している。

石敷811

F-44区に位置する。掘型は不明瞭で形状、規模とも不明確である。礫は長さ3.5m、幅0.5mの範囲に広がりをもっている。また、北端部から東へ直角に折れた状態で終わっている。礫は、掌台のものが主として利用されている。主軸の方向は北29度西を測る。

出土遺物　遺構からは少量の遺物が出土している。その殆どが糸切底土師器の細片であるほかに、陶磁器、瓦が含まれている。陶磁器は、肥前系の染付碗があるほかに、李朝陶器、甲目のある褐釉瓶がある。また、土師質の大形土器も含まれている。

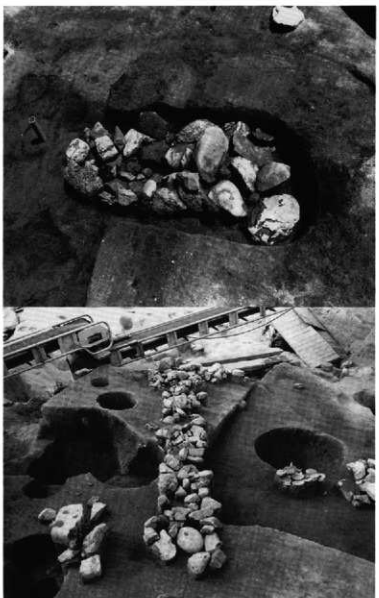
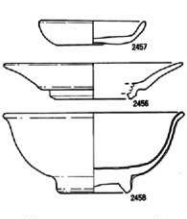


図49　石敷713・811　上　713（西から）
下　石敷811（南から）



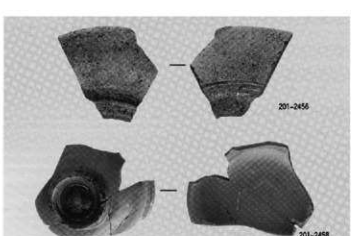


図50　石敷201出土遺物

石敷225

A-54・64区に位置する。実測図図41に示す。石敷11と北端部で重複して新しい。掘型は部分的に確認できる。明確に掘型が確認できる部分では幅0.4m、深さ0.4mの規模を測ることができる。敷石の幅は、0.4mから0.7mと変化が顕著で部分的には集石状を呈している部分もある。54区では、石敷を横断するような位置で配石が出土した。敷石を掘り込むようにして四角い礫を並べている。

出土遺物　少量の遺物が出土している。瓦は土師質、瓦質の資料がある。糸切底の土師器は細片が主である。陶磁器は極少量が出土している。2459は糸切底の土師器である。2460は白磁碗である。2462は備前系の擂鉢である。2461は三島手の壺かと思われる細片の資料である。

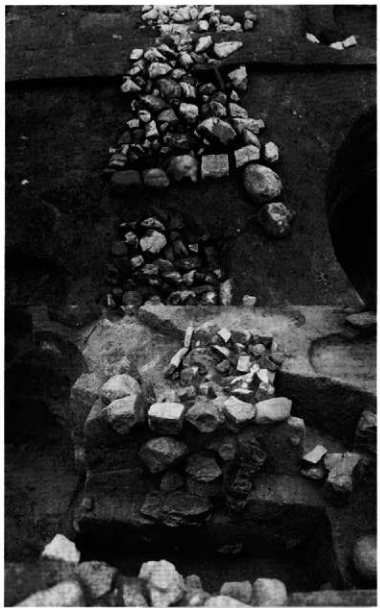
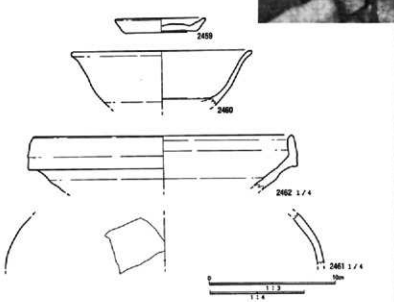


図51　石敷225　上　列石部分（北から）
　　下　同　断面（北から）



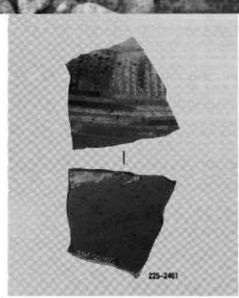


図52　石敷225出土遺物

石組墳10

A-54区に位置する。石敷11及び225と重複して新しい。長さ2.1m、幅1.7mの掘型へ拳大から枕大までの礫を利用し、小形の部材は小口を揃えて平面形が長方形の石室状に構築している。その長さ1.0m、幅0.5m、現状での深さ0.5mをそれぞれ測る。また石組部の主軸は北53度東の方向である。覆土は黒褐色粘質の砂で全体に一様である。覆土中には構築部材と思われる礫がかなりの量含まれており、最終的には破壊され埋め立てられたものかもしれない。

出土遺物　遺物は覆土中から総量でコンテナ1程の分量が出土した。遺物の1/3は染付を主とした肥前系の陶磁器である。完存～大破片の資料を多く含んでいる。糸切底の土師器には径8cm程の資料が顕著である。備前系擂鉢、土師質の大形製品が含まれているほかに、瓦類の資料が少量含まれている。

2463～2465は糸切底の土師器である。2463の口径は8.2cm、器高1.3cm、底径6.4cmを測る。2464は同様にして、8.1cm、1.5cm、6.0cmを，また2465は、同じく8.3cm、1.5cm、6.3cmをそれぞれ測る。2467～2468は肥前系の染付である。2468は外底面に「大明年製」銘が入れられている。2466は陶器碗である。2466は口縁部の一部を欠くほかは完全な形で出土した。ガラス光沢をもった透明釉が掛かり、内外面とも刷毛目を施されている。

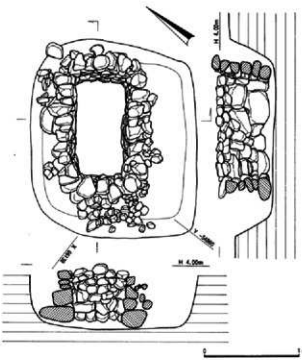


図53　石組墳10実測図（1:40）

図54　石組墳10（北から）

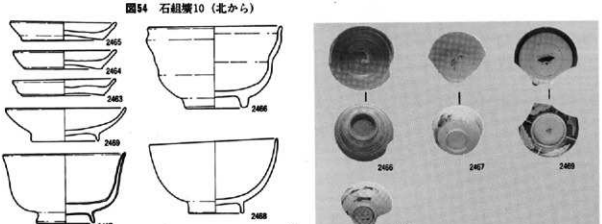


図55　石組墳10出土遺物

石組墳20

A-55区に位置する。長さ2.0m、幅1.4mの掘型に比較的偏平な割石を主として用いて石室状の石組を作り付ける。部材は枕大のものからそれよりやや小さいものまでを主として用いている。本遺構では,小口側の一辺を後に改築したものか長辺に沿って0.5m程入り込んだ位置に短辺側の壁が再構築されている。改築後の石組の内法は長さ1.0m、幅0.7mで現状での深さは0.4m程を測る。また、その長軸は北25度西となる。土壙内の覆土の断面を観察すると、下半部に灰層が、上部には灰褐色シルトがレンズ状に堆積していることから、人為的な埋立がおこなわれた可能性が考えられる。また、小口側の改築後の裏込部は焼土で埋められていることも注意される。

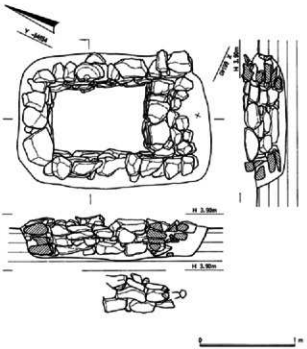


図56　石組墳20実測図（1:40）

出土遺物　構築部材に石臼が組み込まれている。覆土中からは、少量の遺物が出土している。何れも少量づつであるが、陶磁器は明染付が主となっている。また、備前系の甕の細片が含まれている。2473は糸切底の土師器であるが、外底面に縄の圧痕が残されている。2474・2475は染付である。

図57　石組墳20（南から）

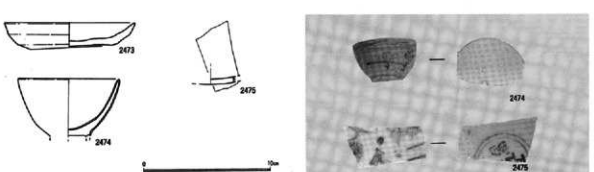


図58　石組墳20出土遺物

石組墳30

A-55区に位置する。基底の1段、部分的に2段が遺存するのみである。石組内の内法は、長さが推定で0.8m、幅0.7m、深さは現状で0.2mを測る。遺物は少量出土した。糸切底の土師器細片のほかに、青磁瓶、陶器瓶、備前系擂鉢が含まれる。2470は、糸切底の土師器である。口縁部が大きく開く。

図60　石組墳30（南から）

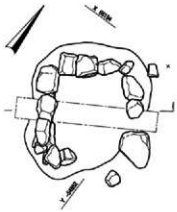


図59　石組墳30実測図（1:40）

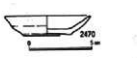


図61　石組墳30出土遺物

石組墳35

A-55区に位置する。基底の1段が部分的に遺存するのみである。石組内の内法は、長さは不明、幅0.7m、深さは現状で0.2mを測る。遺物は少量出土した。今回報告しないが、銅銭の出土が顕著である。2471は李朝陶器、2472は青磁碗細片の資料である。

図63　石組墳35（南から）

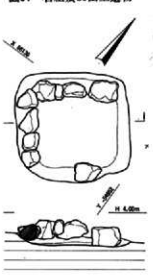


図62　石組墳35実測図（1:40）

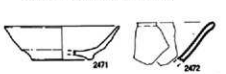


図64　石組墳35出土遺物

石組墓70

A-55区に位置する。石組の上半部を破壊、部材を墓内へ投棄した状態で検出した。半ばを土留工により破壊されている。1.5mの幅をもつ掘型一杯に長さ20～40cm程の礫を組み上げている。現状で2段ほどが遺存している。一方の側には拳大の礫で裏込めを行っている。遺存する側の内法は0.8mを、現状の深さ0.3mを測る。

出土遺物　遺物は上述したような構築部材に混じってコンテナ2/3程の分量が出土した。このうち1/3が瓦である。細片または小破片の資料で玉縁の丸瓦、無文の軒平瓦を含んでいる。2514・2515は糸切底の土師器、2517は白磁、2521は青磁皿である。2516は肥前系の染付、2512も同系の青磁で内底面を輪状に掻き取る。2513は唐津系の大皿であろうか、胎土は褐灰色を呈す。2511は陶器擂鉢である。

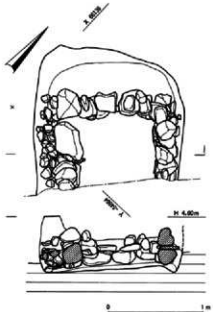
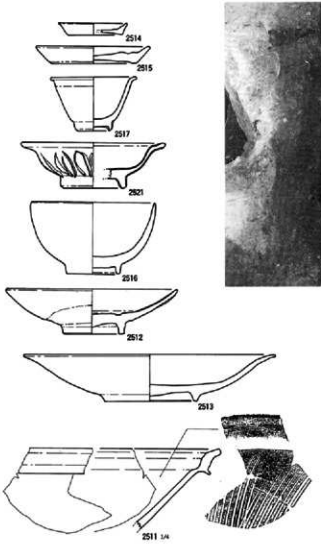


図65　石組墓70実測図 (1:40)

図66　石組墓70



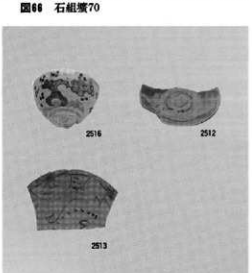


図67　石組墓70出土遺物

石組壙87

B-53区に位置する。恐らく長辺側であろうが、調査区外壁の土留工により破壊されている。長さ30cm程の河原石を選んで使用しているようにみえる。やはり構築部材が壙内へ投棄されたような状態で出土している。現状で、長さ1.4m、幅は不明である。

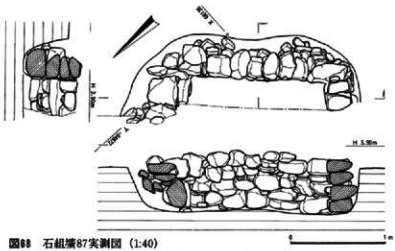


図68　石組壙87実測図（1:40）

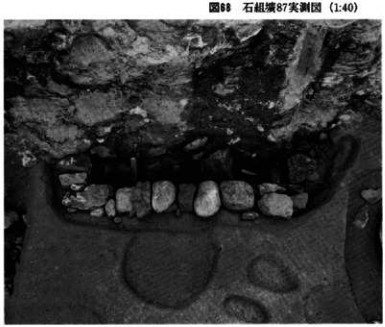


図69　石組壙87（南から）

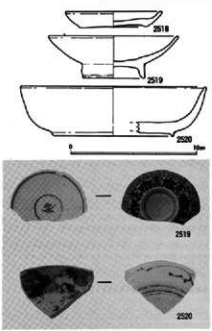


図70　石組壙87出土遺物

石組は4段程が遺存しており、その深さ0.6mを測る。また主軸の方向は、北40度30分東を測る。

出土遺物　コンテナ1/4程の分量が出土した。土師質の製品が半ばを占めている。2518は糸切底の土師器、皿2519・皿2520は肥前系の染付である。

石組壙100

B-45区に位置する。基底の2段が遺存するのみである。また南半部は重複して新しい遺構により破壊されている。構築部材に20～30cmの石材を使用している。石組の平面形状は判然としないが、現存する長さ1.1m、深さは0.2mを測る。

出土遺物　覆土中からコンテナ2/3程の量が出土した。遺構規模からすると多い出土量である。瓦が大きな量比

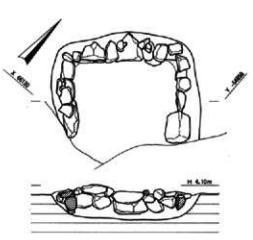


図71　石組壙100実測図（1:40）

をしめるほかに、肥前系の陶磁器、瓦質の土器更に、李朝陶器かと思われる瓶の破片が出土している。2522～2525は糸切底の土師器である。2523はやや形状の異なる資料である。器表の荒れが著しい。2526は陶器皿である。2527・2528は瓦質土器である。2526は円筒形、2527は異形である。2527の外面には篦描きの文字がある。

図72　石組遺100（東から）

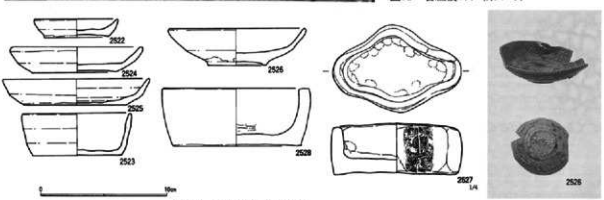


図73　石組遺100出土遺物

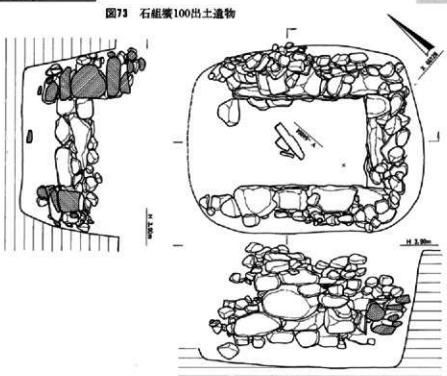
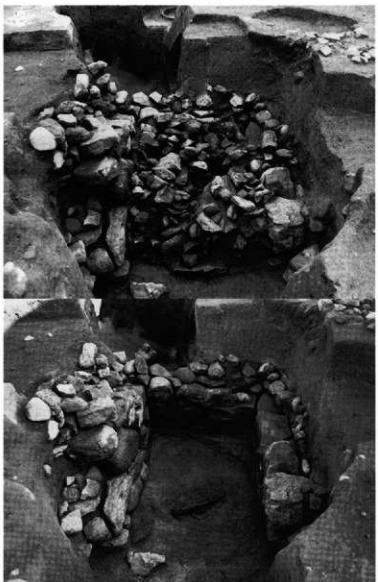


図74　石組遺101実測図(1:40)

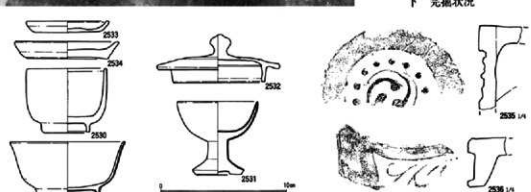


石組墳101

B-44区に位置する。隅丸の長方形状の掘型一杯に60～15cm程の大小の石材を組み込んで、石室状に組み上げている。平面形状は長方形を呈し、小口側の一端は後世の掘削により破壊されている。現状で、計測できる長さ1.3m、幅0.9m、深さは1.1mを測る。墳内は、図74上に示すように石組の上部構築部材と思われる礫及び瓦の細片などで埋められている。

出土遺物　投棄された礫中から瓦が多量に出土したほかに、土師質の各種の道具類が多数出土している。また、小形の陶磁器類が比較的多数出土している。2533・2534は糸切底の土師器である。2529～2531は肥前系の染付である。2532は陶器蓋である。瓦には軒瓦が含まれている。2535は軒丸瓦、2536軒平瓦の何れも小破片の資料である。

図75　石組墳101
上　墳内礫出土状況(北から)
下　完掘状況



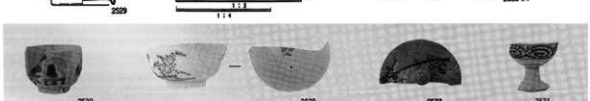


図78　石組墳101出土遺物

石組壙105

B-53区に位置する。片側を外壁の土留工により破壊されている。隅丸の長方形状の掘型一杯に利用し、長さ0.4～0.5m程の石材を用いて小石室状に組み上げている。現状では石組2段が残るのみであるが、壙内にそれ以上の部分の部材を崩し、投棄しているような状況が見て取れた。現状で長さ1.3m、幅1.0m以上、深さ0.3mをそれぞれ測る。

出土遺物　遺物はコンテナ2/3程の分量が出土した。2/3は瓦類で、燻しのある平瓦・丸瓦と被熱したものか赤化したような破片資料とが同量ある。2439は糸切底の土師器である。口縁付近に煤状の付着物が残る。2538は李朝陶器碗の口縁部破片である。2537は青磁瓶の口縁部1/3程の破片資料である。2542は備前系擂鉢の細片資料である。2541は備前系と思われる甕口縁部細片資料である。嘴部を折り返して口縁として成形している。2540は軒平瓦の瓦当部細片資料である。瓦当面には1条の凹線のみがある。

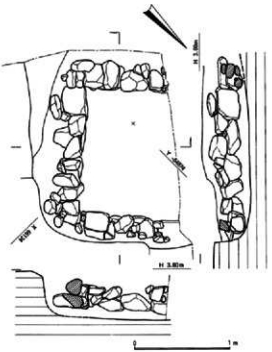


図77　石組壙105実測図（1:40）

図78　石組壙105（西から）

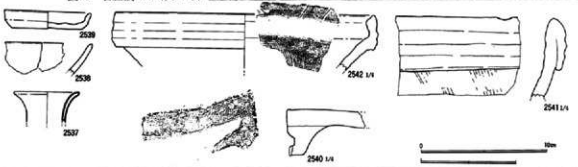


図79　石組壙106出土遺物

石組壙125

A-55区に位置する。長径0.9m程の楕円形状の掘型に沿って掌大の石材を組み上げている。底面には、中央部で2～3段に石材を敷いている。石組は平面形が楕円形状を呈し、その長径0.5mを測る。底面の礫までの深さは0.4m、礫の厚さは0.2mを測る。覆土は、粘性の強い黒褐色砂である。

図81　石組壙（東から）

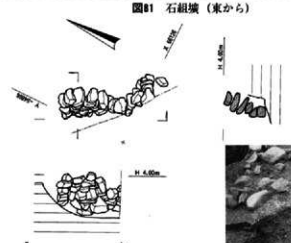


図82　石組壙128実測図
(1:40)

るため、全体の形状は不明である。掘型は不明確であるが、断面の観察からするとその壁にもたせ掛けるように石材の小口をそろえて積み上げている。他の石組と同様石室状を呈していたのか、或いは石垣状を呈していたのかは判らない。

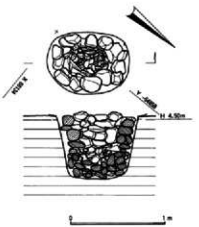


図80　石組壙125実測図
(1:40)

出土遺物　覆土中から比較的密に出土した。1/3が瓦の細片資料である。丸瓦には縄目の叩目が残る。糸切底の土師器は極少量が出土している。土師質の土器には、盤形の容器がある。2544は糸切底の土師器である。2543は赤絵碗である。内底面に目痕かと思われる点状の斑点が認められる。2545は陶器擂鉢である。糸切底で、内面には、粗い擦り目を全面に刻んでいる。使用による磨耗が著しい。

石組壙128

B-44区に位置する。土留工に接した位置にあ

図83　石組壙128（北から）

石組遺構154

D-42区に位置する。他の石組遺構からはやや離れた位置にある。調査区外壁にかかり、遺構の隅部のみの調査となった。20～30cm程の割石を使用して石室状に組み上げている。現状では2段ほどが遺存している。平面上での規模は不明である。深さは現状で0.2mほどである。覆土は暗灰色で粘性のある砂である。遺物は出土しなかった。

図85　石組遺構154（東から）

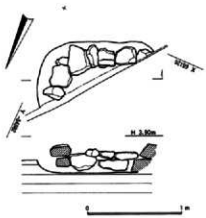


図84　石組遺構154実測図（1:40）

石組遺構167

C-43区に位置する。撹乱により半ばを欠失している。掘型に沿った位置に長さ20～30cm程の割石を組み上げて構築したものと見えるが、現状では一部に2段ほどが遺存しているほかは配石状に角礫が並んだ状態で出土した。長さは不明であるが、幅は0.6m、深さは0.3m程である。主軸の方向は北20度西をとる。

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に、少量が出土した。図111にその一部を示す。糸切底の土師器は細片が極少量出土している。備前系擂鉢も含まれる。2546は李朝陶器碗の口縁部細片である。刷毛目が施される。釉は薄く、ガラス状光沢がある。2547は白磁皿である。1/4程の資料である。釉は無色透明で発泡している。

図87　石組遺構167（東から）

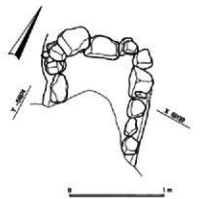


図86　石組遺構167実測図（1:40）

石組壙168

C-36区に位置する。この位置では、石組壙169、170が密集、重複している。石組壙168は、他の石組壙169、170と重複して新しい。掘型は不明瞭である。石組部の構築部材として長さ20cmから40cm程の割石或いは転礫を用いている。石組の内法は、平面形が不整な長方形状であるとして、長さ1.0m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。主軸の方向は、北37度西にとっている。石組は2ないし3段が遺存している。覆土は褐灰色の粗砂混りシルトで、下部では木炭、礫などを含み、断面ではレンズ状に堆積していることが判る。

出土遺物（図111）　遺物はコンテナ1/10程の量が出土した。その2/3は糸切底の土師器の細片資料である。それ以外は、肥前系の磁器、備前系の擂鉢、瓦質の擂鉢、瓦等である。瓦は焼け歪みかと思われる変化を示している。遺物の量は瓦を除くと極少量である。2549は肥前系の染付である。2548は鉄釉のかかる陶器擂鉢である。

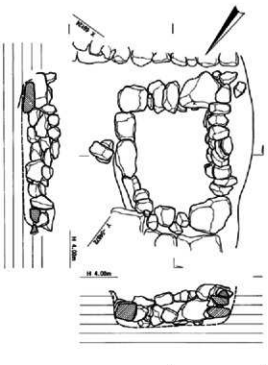


図88　石組壙168実測図（1:40）

図89　石組壙168・169・170（南から）

石組墳169

C-43区に位置する。石組墳168と重複して、それよりも古い。石組の平面形は長方形状を呈し、その短辺側の一方が攪乱により破壊されている。長さ40cm前後の立方体状の石材を主として石室状に組み上げていたものと思われる。現状では下底部の1段のみが確認できる。石組の内法は、長さが不明である。幅は0.7m、深さは0.5mを測る。石組の主軸は北64度東となる。覆土はレンズ状に堆積しているものと観察された。全体に灰色を呈するシルトで、間に粗砂混りの部分、焼土ブロックを含む部分をはさんでいる。底面近くでは、シルトブロックを含んでいる。

出土遺物　遺物は覆土中から総量でコンテナ1/10程の分量が出土した。糸切底の土師器細片資料が半ばを占める。残りは、瓦を除くと他の資料は極少量である。出土遺物の一部を図111に示す。2552は糸切底の土師器、2550は明染付であろうか、瓶とみえる。2551は備前系擂鉢である。

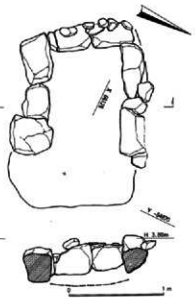


図90　石組墳169実測図（1:40）

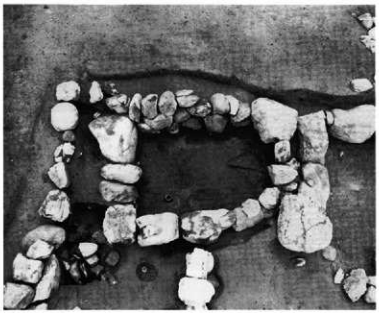


図91　石組墳168（東から）

石組墳170

石組墳168と重複し、それよりも古い。下底部の一段のみ石組が遺存した状態である。ただ平面形状は他の例より細長く、若干の疑問が残る。現状で、幅0.7m、深さ0.2m程の規模である。

出土遺物　少量出土している。2554は青磁盤で、釉は明緑色を呈し、高台内面に目痕を残す。2553は土師質土器の擂鉢で、焼成は堅緻である。

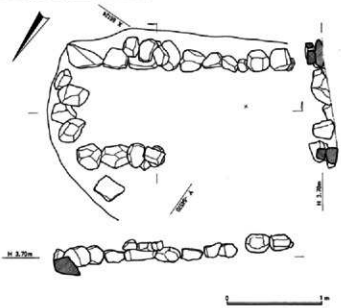


図92　石組墳170実測図（1:40）

石組墳183

C-43区に位置する。柵182に添うような位置と方向をにある。大形の石材を使用する辺と、より小形の石材を使用する辺とがある。小形の部材を使用した部分では2段の石組として残っている。隅丸の掘型に平面形が正方形状となるように石材を組んでいる。内法は一辺が0.9m、深さは現状で0.3mを測る。覆土は粗砂を含む黒褐色シルトである。軸の方向は北29度30分西をとる。

図94　石組墳183（西から）

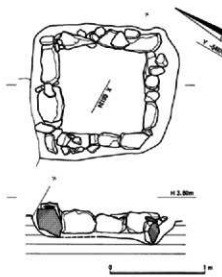


図93　石組墳183実測図（1:40）

出土遺物　図111に示すほかに少量の遺物が出土している。2556は白磁碗、2555は李朝陶器碗である。何れも釉は白濁している。

石組墳184

C-43区に位置し、柵182に沿う位置と方向をとる。石組は、部材の小口側を利用する部分と、長辺側を利用する部分とがある。石組内法で、一辺が0.9m、深さ0.4mを測る。軸の方向は北37度30分西である。覆土は黒色シルトで、灰白色部、黒褐色砂を挟む。

出土遺物　図112に示すほかに少量の遺物が出土した。2559は糸切底の土師器、2558は陶器擂鉢である。褐緑色の釉がかかる。

図96　石組墳184（東から）

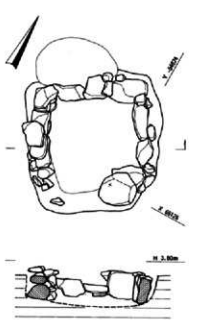


図95　石組墳184実測図（1:40）

石組墳242

A-55区に位置している。撹乱等により隅部が欠失したものと見えるが、あるいはもともと石垣状の構造であったものかもしれない。石組には径50cm程の石材を用いる部分と、20cm前後の材を用いる部分とがある。掘型とするものが石組下底面より遙かに深い土壙となっている点、重複して古い遺構の可能性が残る。現状で長さ1.2m程が遺存している。側壁の高さ0.4mを測る。壁面の方向は北49度東となる。

出土遺物　覆土中から礫に混じって総量でコンテナ2/3程の分量が出土した。2561は糸切底の土師器、2559は染付皿、2560は陶器皿である。2562は陶器擂鉢である。

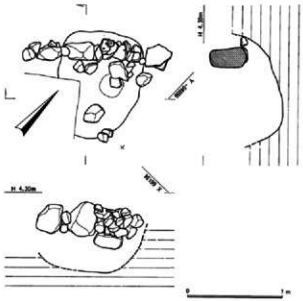


図87　石組墳242実測図（1:40）

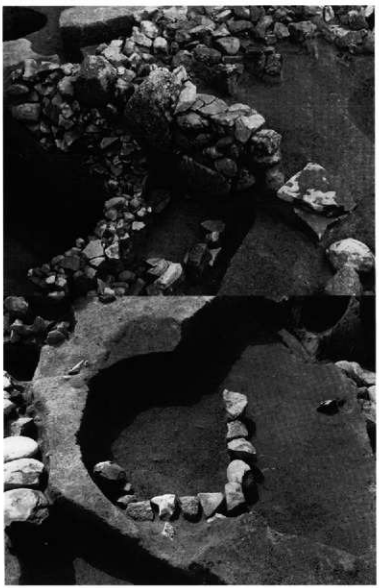


図88　石組墳242（北から）

石組墳243

B-44区に位置する。不整な楕円形状の掘型の下底面に角礫状の石材の小口を揃えて配している。1段のみである。上部の部材は抜き取られたものか、本来このような形状であったものかはわからない。

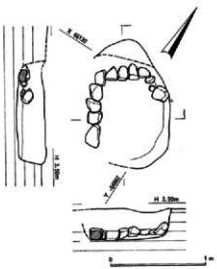


図89　石組墳243実測図（1:40）

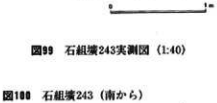


図100　石組墳243（南から）

石組壙681

C-44区に位置する。石組壙の1側辺の遺存するものとした。拳大の礫の小口を揃えて組み上げている。石組の下底面が傾斜を持っている点疑問である。石組の方向は北72度東となる。あるいは石垣様の構築部区かもしれない。

出土遺物　コンテナ1/10程の分量が出土した。1/2は瓦である。

図102　石組壙681（北から）

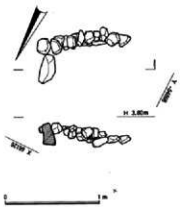


図101　石組壙681実測図（1:40）

図112に一部を示す。2563・2564は何れも染付である。

石組壙701

D-31区に位置する。不整な方形状の掘型の底面で石組が「く」の字形に検出された。一部が2段に残る。掘型の壁に沿い、石材の小口を揃えて配されている。掘型の一辺が1.5m程の規模である。遺構の軸の方向は北17度30分西となる。

出土遺物　極少量が覆土中から出土した糸切底の土師器2565・2566、土師質土器の鉢、備前系の擂鉢が出土している。

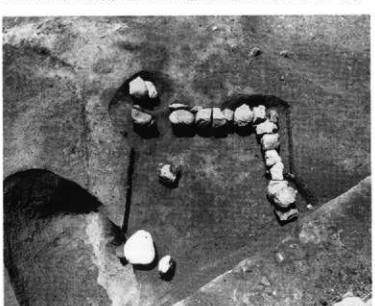


図104　石組壙701（東から）

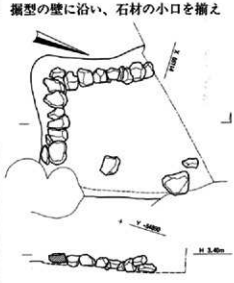


図103　石組壙701実測図（1:40）

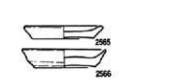


図105　石組壙701出土遺物

石組墳781

D-32区に位置する。不整な隅丸長方形状の掘型の壁に沿い大きなものでは100cm程の石材を使用して長方形の石室状に組み上げている。石材下底面には横木を敷いて基礎工としている。部材は各所で欠失しており、全体の詳細は不明である。現況からすると、平面状での規模は長さ3.0m、幅1.2mを復原することができる。深さは0.2m程である。長軸の方向は、北48度東となる。

出土遺物　覆土中から少量が出土した。半ばを占める糸切底の土師器はほとんどが細片の資料である。瓦は燻しのある平瓦である。備前系の擂鉢は擦り目を内面の全体に施す資料である。瓦質土器の大形の容器が破片で出土している。2573・2568は糸切底の土師器である。口径は前者が6.8cm、後者で8.7cmを測る。2567は肥前系の染付碗口縁部破片である。

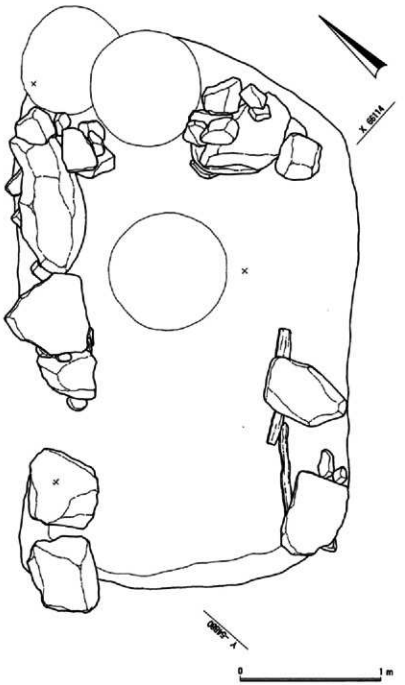


図106　石組墳781実測図（1:40）

図107　石組墳781（南から）

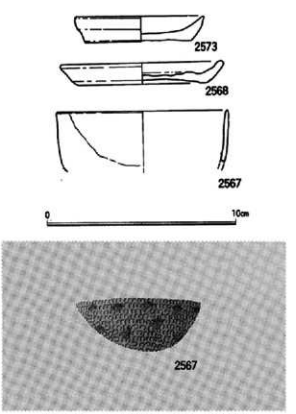


図108　石組墳781出土遺物

石組壙815

F-44区に位置する。南半部は未調査部にかかり、西側は重複して新しい遺構により破壊されている。このような理由により、遺構815の平面形状は不明瞭である。屈曲する隅部の状況からすれば、四辺形状を呈するものと考えられる。遺構掘り込み面が黒褐色砂層であることから、掘型は上部では判然としなかった。下底部近くの結果からすると石組は掘型壁に沿って組み上げられており、その結果として若干の傾斜をもつ法面となっている。部材には砂岩を主とした、掌大の角礫が多く用いられ、その中により大形の石材が混じる。

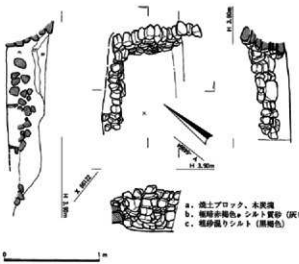
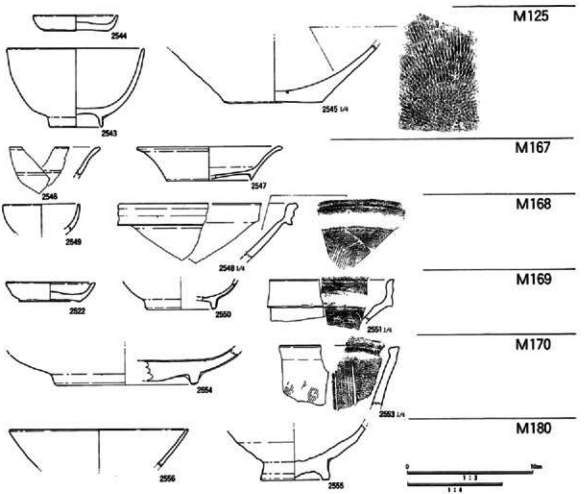


図109　石組壙815実測図（1:40）

これらの小口をそろえるように組み上げて石室状の石組を構築している。覆土は粗砂混りの黒褐色シルトである。下半部底面まで石組構築部材かと思われる礫がいっぱいに詰まった状態で出土した。これに混じって遺物が出土している。覆土の上部では焼土塊、木炭塊を含んだ薄層、灰の混じったシルト薄層がレンズ状に重なっている。

出土遺物　上述のように礫に混じって遺物が出土している。総量はコンテナ1/10程の量である。糸切底の土師器のほかは、李朝陶器、白磁、土師質の土器がる。図112に出土遺物の一部を示す。2569は白磁皿の口縁部の細片資料である。2570～2572は李朝陶器碗である。完形に近い資料、大破片に近い資料がある。土師質土器は、擂鉢2576・2575と鍋2574とがある。擂鉢は極粗い擦り目を刻んでいる。

図110　石組壙815
上　土層断面（北から）
下　壙内礫出土状況（南から）



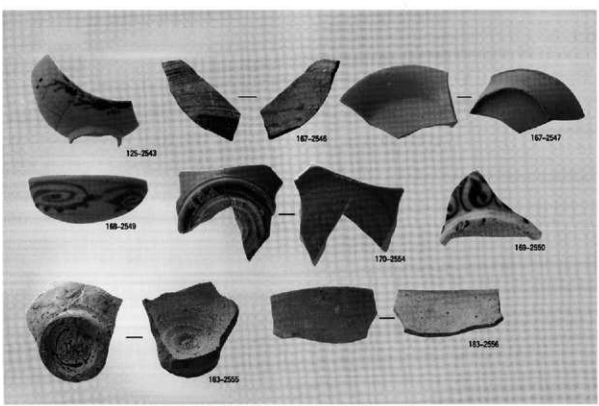
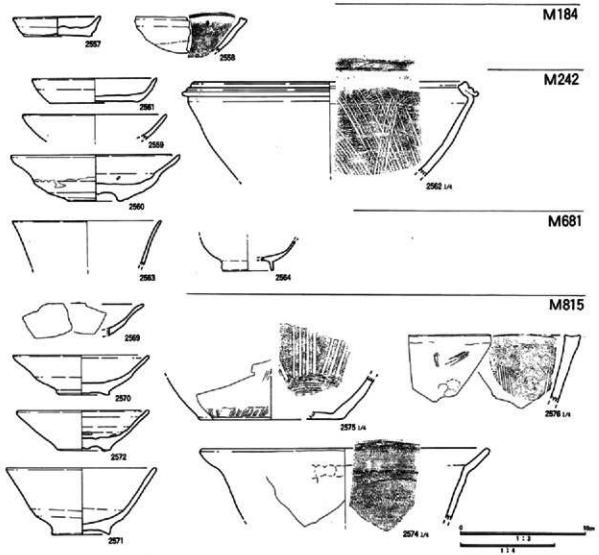


図111　石組墳出土遺物（125・167・168・169・170・183）



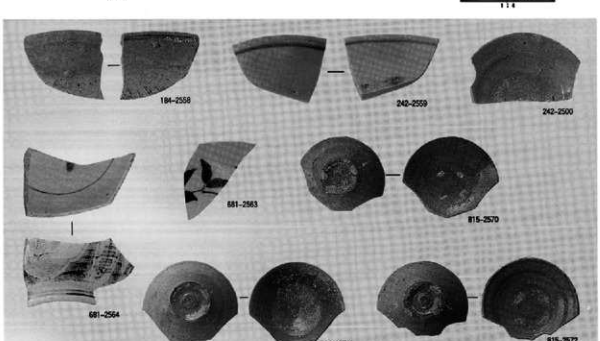


図112　石組壙出土遺物（184・242・681・815）

石組壙956

E-23区に位置する。長径1.3mの楕円形状をした掘型の壁面に沿って石材を井戸側状に組み上げている。結果として内径0.4m程の円筒形の構築物となる。底面は地山砂層である。深さは0.8m程となる。構築材には鉄滓が混じっている。

出土遺物　遺物はコンテナ2/3程が出土した。土師質土器、瓦がその大部分を占める。瓦には丸瓦のほかに桟瓦が含まれている。

図114　石組壙956（東から）

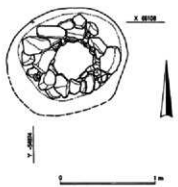
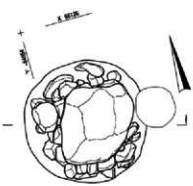


図113　石組壙956実測図

図123には染付碗2580、陶器鉢2579、軟質の陶器擂鉢2577である。



礎石37

A-45区に位置する。土壙18と重複してそれよりも新しい。礎石は40cm四方の自然礫を利用している。これを支える根石部分は、平面形が円形で径0.6m、断面形が逆台形状を呈した、深さ

図116　礎石37（南から）

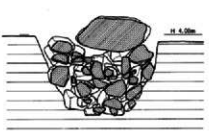


図115　礎石37実測図（1:20）

0.4m程の掘型へ、焼土と石屑で間を充填しながら割石を詰め込んで構築したものである。石材は建物の重量を受けたためか、あるいは構築時突き込まれたためか、掘型壁にめり込んだようになっており、実際の掘型壁は判然としない。

出土遺物　極少量の遺物が出土した。258は糸切底の土師器である。

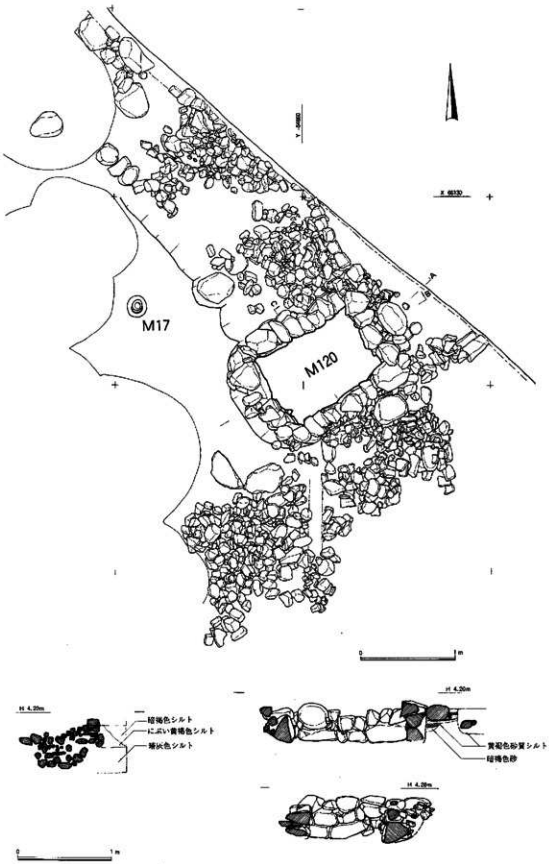


図117　石敷209・石組墓120実測図（1:40）

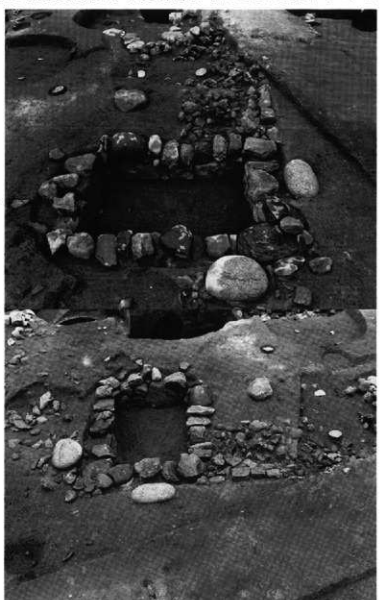
遺構209・石組壊120

報告の順が前後するが、ここで説明する。

遺構209は、B-44・45・54・55区に跨がった位置にある。南北に帯状に礫が広がり、その東辺を限るように礫の配列が確認された。礫は、浅い掘型の中へ土砂と一緒に投入されたような状態で出土した。ただ、東辺部の配石下は逆に下部が外側へ張り出すような状態が観察され、積み上げられていた可能性を残している。また、この部分を覆うような土層の堆積も断面図から見て取れる。東辺部の配石部の長さ1.1m、礫の広がりの幅1.1mを測る。配石の方位を求めると北31度30分東となる。

出土遺物　礫の間を埋めた覆土中から、総量でコンテナ1/3程の遺物が出土した。その多くは瓦の破片資料である。燻しのかかる資料である。図122に示す2582は陶器碗で口縁部の一部を欠く他は完存する資料である。高台畳付の3ヶ所に目痕が残る。2583は染付皿、2584は備前系擂鉢である。2584の内底面は使用により顕著に磨滅している。

石組壊120は、遺構209に取り込まれるようにみえる位置にある。石組壊120の周囲の礫の配列がやや異なり、新たに掘型を掘削、構築した可能性も残るが、東辺の配石がそれの上まで延び、かつ、両者の軸線が直交することを併せ考えて、一体のものであった可能性のほうが高いと言えよう。石組は、掘型に接して石材を内面が長方形の石室状を成すように組み上げたものである。石材の大きいものは長さ50cm程の転石を利用している。また、円礫の利用が他に比べて顕著である。石組の内法は、長さ1.1m、幅0.8m、深さは現状で0.4mを測る。石組主軸の方向は、北58度東となる。覆土は全体としては黒褐色シルトであるが、間に粗砂層ほかの砂質部分の薄層をレンズ状に挟み、人為的でない、埋没の可能性が考えられよう。



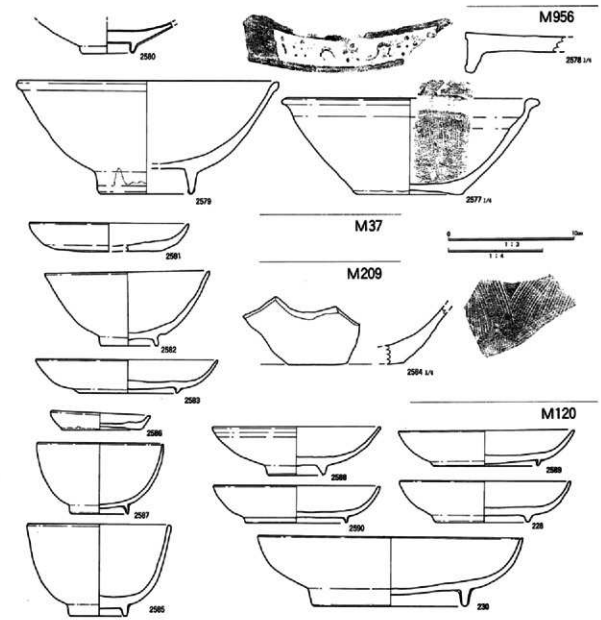
出土遺物　遺物は覆土中から総量でコンテナ2/3程の分量が出土した。瓦には桟瓦が含まれている。陶磁器は染付が殆どでこれに陶器碗類が混じる。実測図を図122に示す。2586は糸切底の土師器である。2585・2588は陶器で、2588は内底面の釉を輪状に掻き取っている。2587・2590・2589・228・230は染付である。

図118　遺構209・石組壊120　上　南から
下　東から

図119　遺構209・石組炉120（北から）

図120　遺構209・石組炉120周囲の礫群（東から）

図121　遺構209・石組炉120前面の断面（南から）



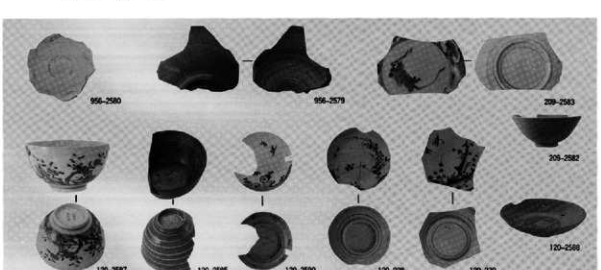


図122　遺構出土遺物（956・37・209・120）

石組909

F-54区に位置する。確認面では石敷とする遺構と見えたが、それのように掘型へ礫を充填したものではない。各側面で礫の小口面を合わせ、明確な面を構成するように組まれ、また、隅部には枕大の亜角礫を使用し、それ以外の部分は拳大以上の礫で埋める。その結果として整った直方体状を呈する。平面形は長さ1.1m、幅0.6mの整った長方形状を呈する。高さは石材下底部から0.4mを測る。遺構の主軸は、北33度西となる。構築礫間には空隙が残されている。各側面は上方に向かい若干内傾した面となっており、このことからも掘型内へ作り付けられたものではなく、自立して地上に立ち上がっていた構造物である可能性が大きい。このことは、崩落した遺構東端部に丁度当てはまるような礫が、それより東側の覆土中に分布していたという調査時の所見からも頷ける。調査時、覆土を観察するために畦を残して土層断面の観察をおこなったが、明確な掘型、あるいは埋め立てを示すような状況は観察できなかった。

何れにせよ、外観を意識して構築されたことは確かなことであろう。

出土遺物　遺構中から少量の遺物が出土した。糸切底の土師器の他に図124に示すような瓦質の火鉢が細片資料ではあるが出土している。

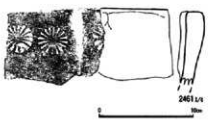


図124　石組909出土遺物実測図

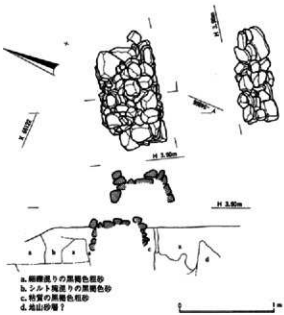


図123　石組909実測図 (1:40)

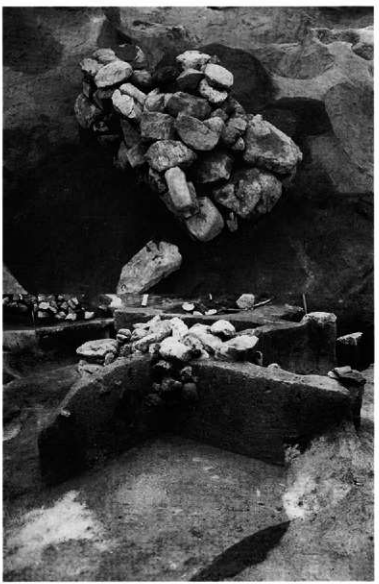


図125　石組909　上　全景（東から）
下　覆土断面図

遺構74

A-54区に位置する。かなりの部分を撹乱により破壊されている。被熱によるとおもわれる色の変化と、硬化部分が不整な形状を呈して広がっている。周辺部は黒褐色ないし黒色であるのに対して中心部は赤化して特に固い。この部分で断面を観察してみると、小穴状の掘り込みが重複しており、上位のそれの覆土に色調の変化、硬化が同心円状に進行していることが判る。上部の構造は不明なままであるが、何らかの溶解炉の可能性がある。

図127　炉74（南から）

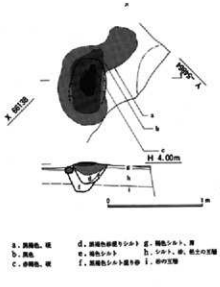


図126　炉74実測図（1:20）

土器埋置117

B-44区に位置する。やや深い位置で検出した。糸切底土師器坏を合わせ口にして埋置している。出土時はやや傾斜して口縁がずれた形で確認した。掘型は明確ではない。遺物463・464を図示する。いずれも口縁が大きく開く糸切底の土師器である。

図130　土器埋置117（南から）

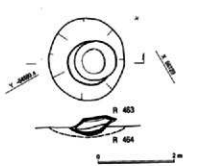


図128　土器埋置117実測図
(1:10)

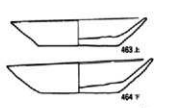


図129　土器埋置117出土遺物実測図

土器埋置256

A-65区に位置する。糸切底の土師器坏を上下に合わせ口にして埋置している。ほぼ水平におかれた状態で出土した。掘型は不明瞭、土器内の覆土も遺構が掘り込む黒褐色砂層と区分ができない。埋置された土器は同形同大である。口径は11cmを前後し、底径は8cm、器高は2.5cmを前後する。内底面には横方向の撫で調整をおこなう。

図132　土器埋置256（西から）

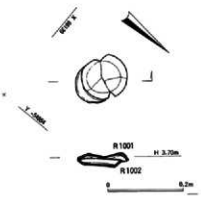


図131　土器埋置256実測図
(1:10)

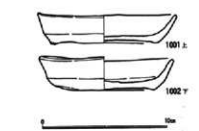


図133　土器埋置256出土遺物実測図

土器埋置825

F-44区に位置する。1面を掘り下げ中に検出、調査した。掘型は不明で、遺物が集中出土することでそれと確認した。出土遺物を図147に示すが、全て糸切底の土師器である。やや一方に傾斜している。何枚かを重ねたような状況が見て取れる。正置したものだけでなく倒置したものもある。遺物の出土範囲からすると、これらを埋置した方形状の土壙が復原できようか。

図135　土器埋置825（南から）

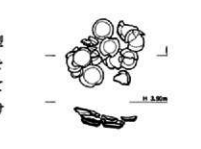


図134　土器埋置825実測図
(1:20)

出土遺物　上述のとおり糸切底の土師器のみを出土する遺構である。口径から2群に分離できる。7cm前後の口径の一群と、11cm前後の口径の一群とである。後者が圧倒的に多い。

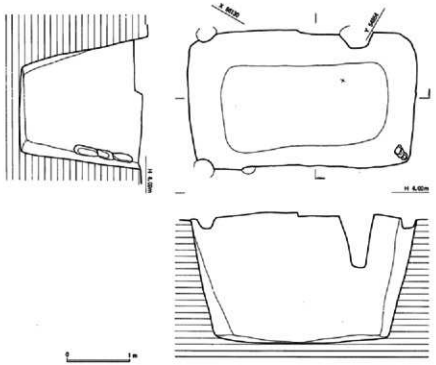


図136　土壙18実測図（1:60）

土壙18

A-45区に位置する。平面形が隅丸長方形を呈する土壙である。断面形は深い逆台形状を呈す。平面での長さ3.6m、幅2.1m、深さは現状で2.1mをそれぞれ測る。覆土上部は焼土を含む砂層、或いは焼土そのものの層、中位以下は暗褐色砂層となる。これらはいずれもさらにレンズ状の薄層に分かれて堆積している。

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に出土した。総量でコンテナ1程の分量がある。その半ばは糸切底の土師器である。細片，小破片の資料が殆どである。小形の陶磁器は極少量である。2483・2484は糸切底の土師器、2491は天目碗、2484・2488・2486・2489・2490は青磁碗の資料である。

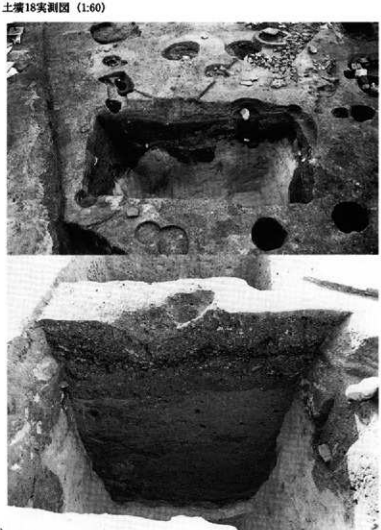


図137　土壙18　上　南から
下　土層断面（西から）

土壙19

A-56区に位置する。平面形が長方形の土壙である。両端とも同じ高さの位置に一段浅い段がある。断面形は箱型を呈するが、一部抉れたような状態の部分がある。覆土は黒褐色砂であるが、間に灰、粗砂の薄層を挟む。何れも遺構の東側の長辺側から流れ込んだ状態を示している。また、両端部にある段は同じ高さにあり、かつ平坦なことからあるいは木蓋等を受けていた可能性も考えられよう。

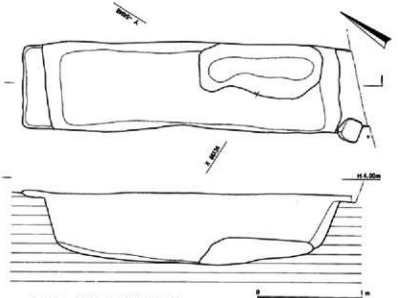


図138　土壙19実測図（1:40）

図139　土壙19（東から）

出土遺物　遺物は総量でコンテナ2/3程となる。2678～2680は糸切底の土師器、2681～2684・2688は染付である。2688以外は明染付であろうか。2688は大形の皿で、白濁する釉下に意匠化された花文を描いている。また、外底面中央に黒褐色の円を描く。2687は備前系の擂鉢である。

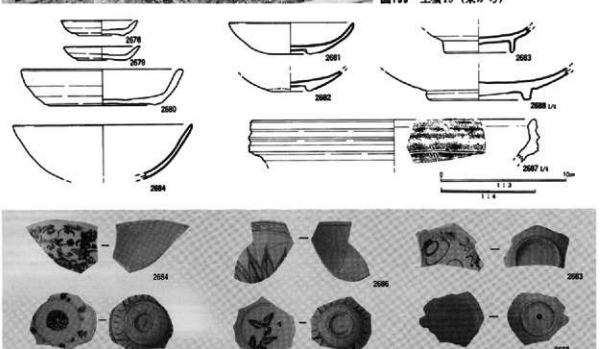


図140　土壙19出土遺物

土壙32

A-55区に位置する。不整な楕円形状の土壙である。断面形は逆台形状を呈す。調査面で長さ1.5m、幅1.1m、深さは0.5mをそれぞれ測る。覆土は黒褐色粘質砂で底部近くには薄い灰層を挟んでいる。遺構北半の覆土中位に礫の集中がある。礫間には空隙が残ったまま埋没している。対する覆土中

図142　土壙32（南から）

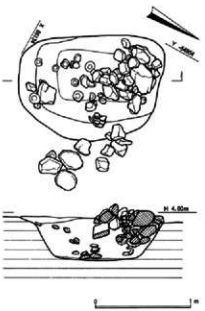


図141　土壙32実測図（1:40）

では、完形あるいはそれに近い遺物が遺構壁に沿うような状態で多数出土している。糸切底の土師器で、底部ではほぼ水平の出土状態となっている。

出土遺物　遺物は、上述の様な状態で出土したもののほかに覆土中から散漫に出土した資料がある。総量でコンテナ1/10程の分量となる。このうち、9/10は糸切底の土師器で完形あるいはそれに近い資料が多数含まれる。図143に示すように、口径が6.5cmを前後する皿形土器、7～8cm前後の皿形土器、11～12cmの坏形土器の3者があるようにみえる。これら以外に、図147に示すように、染付2672・2674、陶器瓶2673がある。

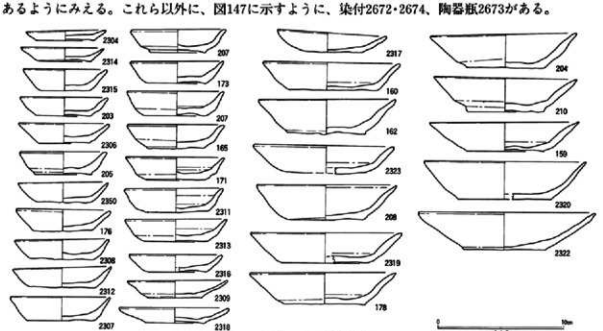


図143　土壙32出土遺物実測図

土壙104

B-53区に位置する。不整な円形状を呈する。断面形は深い皿状となる。土留工部分に一部がかかっている。現状で、径2.1m、深さ0.8m程の規模である。覆土は薄いレンズ状の堆積が観察される。全体としてシルト質土で、砂の量の多寡、灰の混り込み等で細分される。全くの灰層も挟んでいる。一挙に埋め立てされたのではなく、時間の経過による埋没と、人為的な投棄が組合わさって埋没したものと観察された。遺物が覆土中から多量に出土しており、人為的な廃棄等が加わっていることが考えられよう。

出土遺物　遺物は上述のとおり多量に出土した。総量はコンテナ2½箱程が出土している。このうち1½箱までが瓦類である。さらに、瓦質の大形土器が1/2箱、残る1/2箱が、小形の土器、陶磁器類である。実測図を図147に示す。糸切底の土師器は2689・2691・2690と2693・2692・2695・2694の2群に分かれるほかに、器高の大

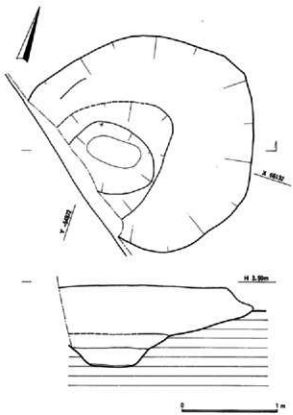


図144　土壙104実測図（1:40）

高の大きな2696がある。2697・2698は染付で、2698の内底面の釉は焼成前に掻き取られている。2699は白磁碗である。2700は青磁盤である。釉は褐緑色を呈す。擂鉢は何れも櫛状工具により間隔の大きな擦り目が施されている。2668は土師質、2667は瓦質の資料である.2670は瓦質の三足の鉢、2669は箱形製品である。2701は面斗瓦であろうか。

図145　土壙104（南から）

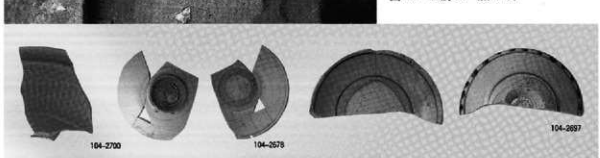


図146　土壙104出土遺物

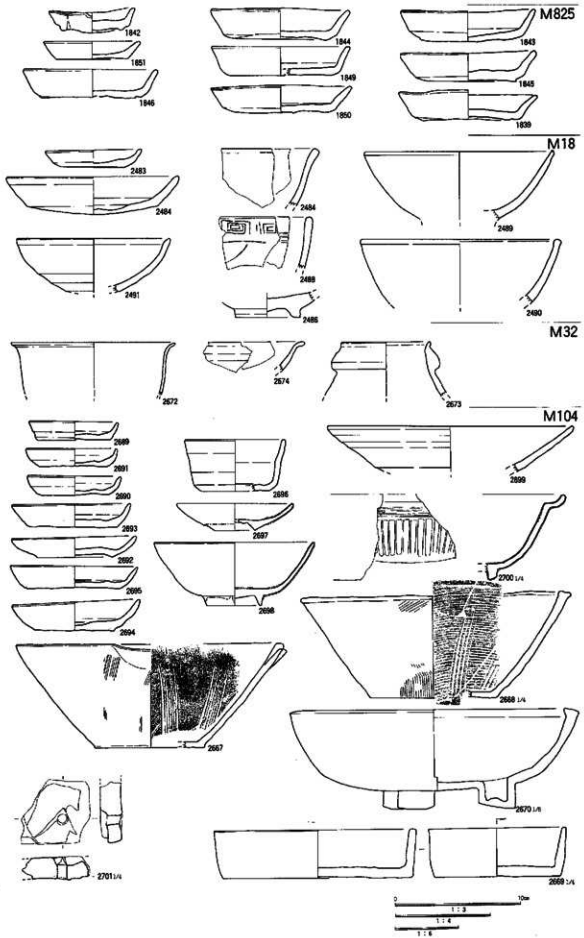


図147　遺構出土遺物（825・18・32・104）

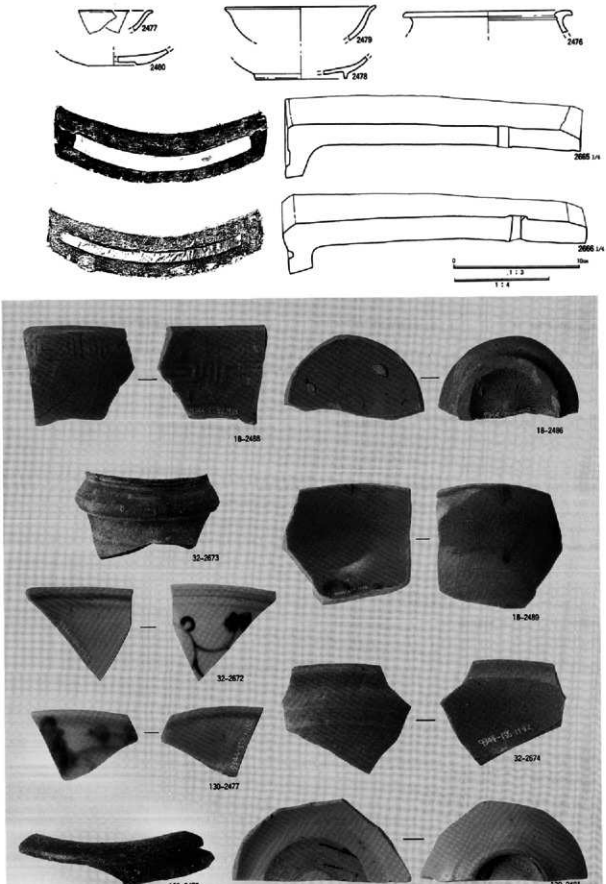


図148　遺構出土遺物（18・32・130）

土壙130

B-53区に位置する。隅丸長方形を復原できる遺構である。南半部は、削平により痕跡程度の遺存であったが、長さ2.1mを復原でき、幅1.1m、深さは北端で0.2mを測ることができる。覆土は焼土、灰、黄色粘土塊を顕著に含む暗褐色砂である。

出土遺物　遺物は瓦を主とし、焼土とともに投棄されたような状態

図150　土壙130（北から）

図149　土壙130実測図（1:40）

でコンテナ2½程の分量が出土した。全体の4/5が平瓦、丸瓦の資料である。完形完存する軒平瓦の資料2665・2666のほかに、染付2477、青磁2480、白磁2479・2478、陶器壺2476を図148に図示することができる。

土壙814、遺構822

F-44・34区に位置する。遺構822は、調査区外壁のにかかり、全体の状況が不明である。両者は重複して遺構814が古いものと観察された。ただし、土壙814は遺構のごく一部が遺存するだけなので不確実なところがある。

土壙814

底部のみが遺存する遺構である。平面形は不整な円形状を呈し、断面形は皿状を呈す。現状で、径は0.8m、深さは中央部で0.2mとなっている。覆土は、壁土、焼土の塊、木炭、灰を多く含んだ黒褐色粘質の砂である。遺物は、遺構底面に沿った位置で、土器類だけでなく木製品が、炭化し、原形を留めた状態で出土している。覆土の状態、遺物の出土状態を考えると人為的に埋め立てられたものとみえる。

出土遺物　上述するように、投棄されたような状態で遺物が出土した。コンテナ1/5程の分量の壁土、炭化した木製品があるほかに、コンテナ1/10程の土器類が出土した。ただし、炭化した木製品は傷みが著しい。

木製品は、脆弱で取り上げられない資料もあった。曲物は側板、底（または蓋）板の一部が遺存した。漆碗も半ばが焼

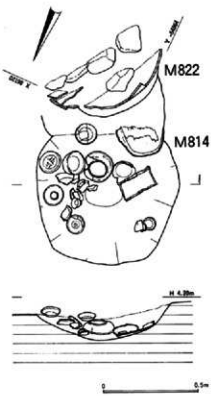


図151　土壙814・822実測図（1:20）

失した状態で出土した。白木箱は、縦18cm、横10cmを復原できる資料である。側板上端部が焼失している。底板の上に側板が載り小口板が内側につく構造となっている。接合は木釘を用いている可能性が高い。

土器類には、土師質鍋、火鉢、擂鉢が極小数含まれる。陶磁器、糸切底の土師器が、破片で出土したほかに上述のように、完形あるいはそれに近い資料が出土している。何れも被熱の痕跡が顕著である。図153に示す。糸切底の土師器は口径が7cmを前後する2327・2038・2326と、口径が11.2cmを測る2328とがある。白磁杯2325・2036・2344のうち、2036は内底面の釉を掻き取っている。2034の外底面には「大明年造」の銘がある。2032は白磁碗、染付には蓙筍底皿2030・2035、高台付皿2034・2031、より大形の2033がある。2329は陶器鉢で、内面のみに施釉する。

遺構822

掘型内へ甕を据えた遺構であろう。出土状況からすると、甕上半部を割り、枕大の礫と一緒に内部へ投棄している。覆土は焼土を顕著に含み粘質のある黒褐色砂である。

出土遺物　遺構の部材である甕2671は備前系で、体部中央部を欠く資料である。口径48.5cm、底径39.3cmを測る。遺構覆土中からはその外に糸切底の土師器2675、陶器短頸壺2676、鉢2677など極少量ではあるが出土している。

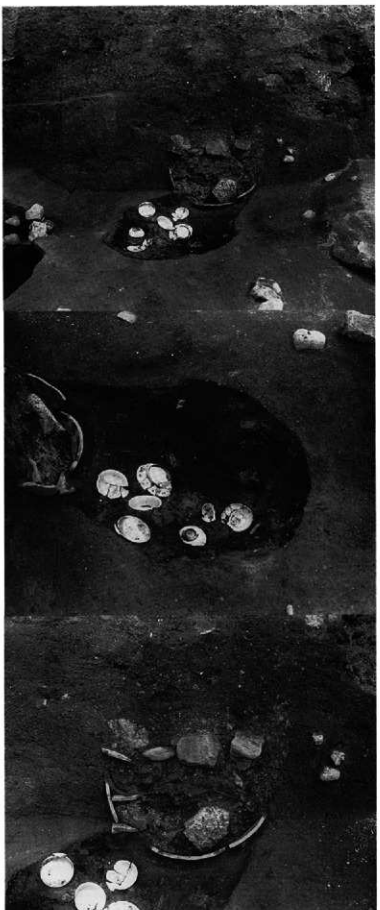
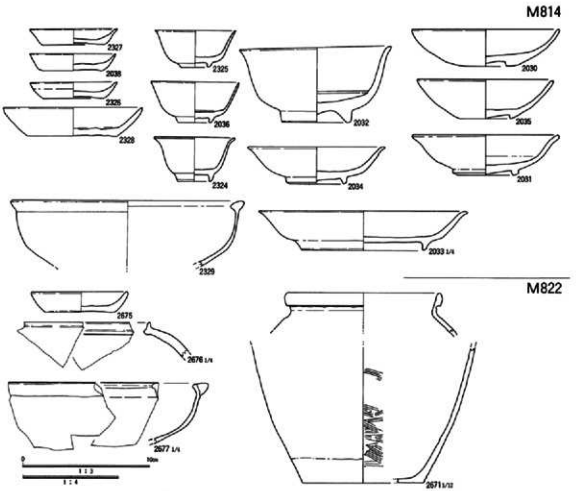


図152　遺構814・822
上　814・822（北から）
中　814（東から）
下　822（北から）



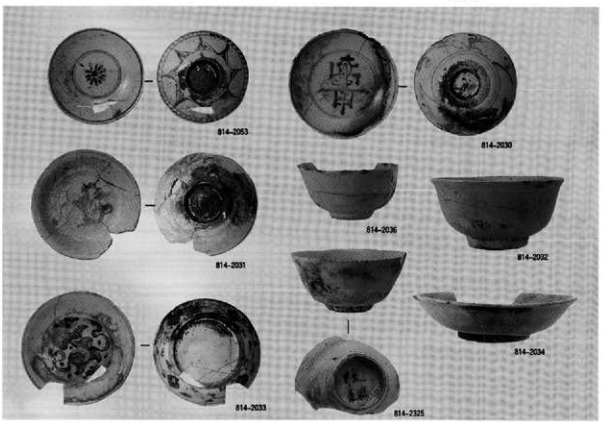


図153　遺構出土遺物（814・822）

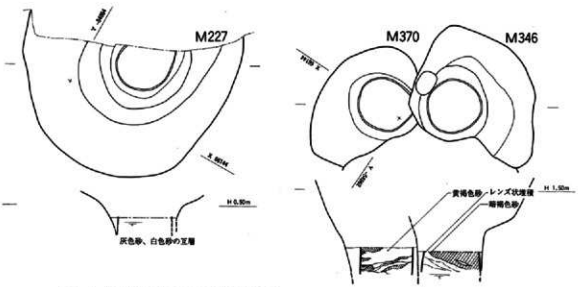


図154　井戸227・344・346・370実測図（1:60）

II-2　2面検出遺構

井戸227・344・346・370

A-64区に位置する。それぞれ重複しており、344、227、346、370の順に新しい。覆土が同じ黒褐色砂のため、重複関係は覆土をかなり下げてのち、確認できた（図154）。

井戸227

掘型は鉢形の断面形で、下部に段がある。標高0.5mの位置で湧水を生じ、これより下位には桶形の井戸側が遺存する。遺物はコンテナ1/10程が出土する。糸切底の土師器2593、青磁2592・2591を図157に示す。

井戸344

井戸58と重複して下位にあり、掘型の一部のみを調査した。遺物は少量が出土した。白磁2594、天目釉陶器2595を図示する。

図155　井戸277・344・346・370確認情況（北から）

井戸346

井戸227と同様の掘型で、断面鉢形で下部に段がある。湧水点付近以下に井戸側が遺存する。遺物はコンテナ1/10程が出土した。糸切底の土師器2605、三島手の碗2559、壷2600、明染付2607、青磁2601・2598・2602、陶器壷2608を図示する。

井戸370

井戸346と重複し、形状も同じである。白磁碗のほか、極少量の遺物が出土した。

図156　井戸277・344・346・370掘りあげ状況（南から）

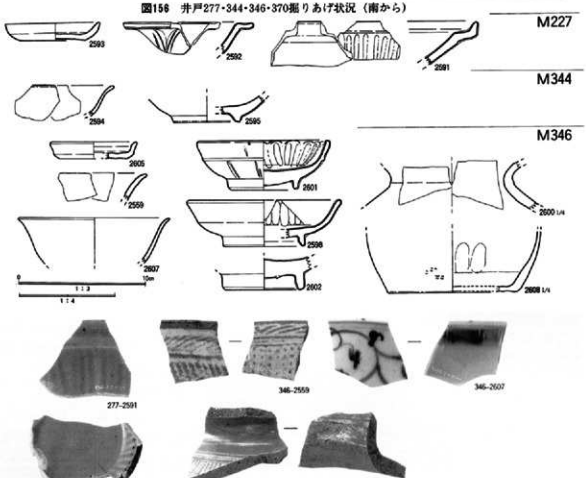


図157　井戸出土遺物（227・344・346）

井戸396

B-53区に位置する。形状は2段になった円筒形状を呈す。平面形は上部で径1.6m程の円形状を、中の段の、中心を外れた位置から径0.9m程で底面となる。段までの深さ0.8m、底部までの深さ1.7mを測り、底面の標高は2mの位置にある。井戸とするには形状、深さともに類例がない。

出土遺物　遺物は覆土中から総量でコンテナ1/10ほどが出土した。その1/2は糸切底土師器の資料である。これには2群がある。口径6cm前後の2611・2610・2609と口径13cm付近の2613・2612を図示する。白磁碗は内底面に目痕を残す。2615・2614は明染付である。2616は軒平瓦である。

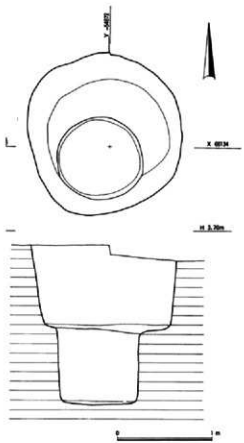
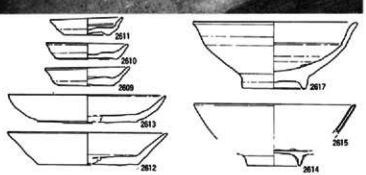


図158　井戸396実測図

図159　井戸396（北から）



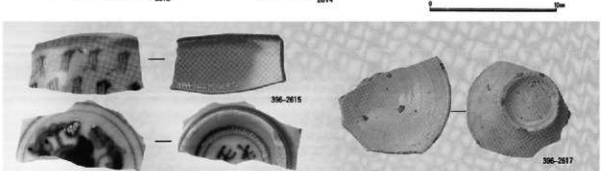


図160　井戸396出土遺物

櫓238・溝283

A-55・65区に位置する。

櫓238

調査時、柱穴が重複して直線状に連続するような状態を検出した。溝状の掘型を観察できる部分もあり、布掘りを行なってのち、柱を設置したことが判る。柱穴が布掘り覆土を掘り込んでいるように観察される部分は、後の補修の可能性を考えておきたい。柱穴の間隔、規模は一定しない。また、平面位置も正しく直線には載らない。柱穴底には根石を多く設置している。柱痕跡が空洞となって遺存する部分もある。

出土遺物　覆土中から出土した遺物は総量でコンテナ1/10程の分量となる。糸切底の土師器細片あるいは小破片がその2/3を占める。2618は糸切底の土師器である。2619は李朝陶器碗、2620は明染付口縁部資料、2621は青磁碗、2622は陶器壺、2633は陶器擂鉢である。

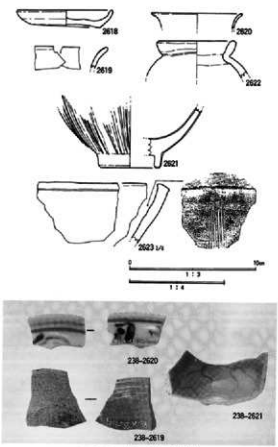


図162　櫓238出土遺物

図161　櫓238・溝283実測図（1:80）

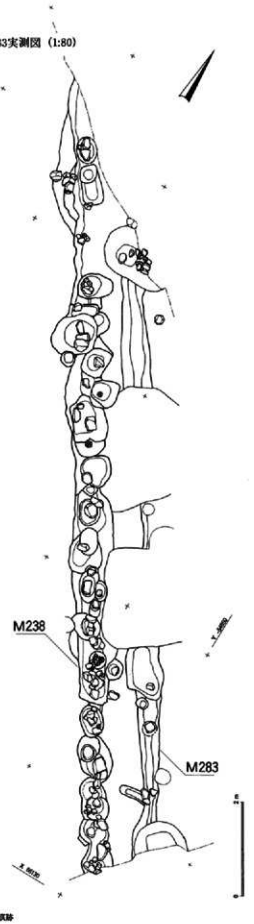
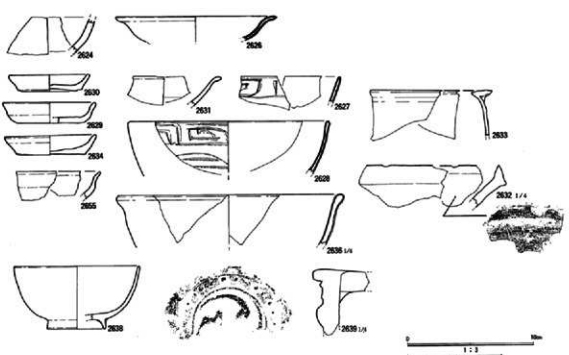


図163　棚238土層断面（南から）

溝283

棚238と平行して東側を走る。黒褐色の砂を覆土とし、南半部の遺存状態の良い部分で深さ0.2m程を測る。幅はこの部分で0.5m程である。65区に係る部分では、第3面の調査の折りに検出した溝がこれにあたるものと考える。棚238の芯々間の距離は1.2m程である。

出土遺物　遺物は少量が覆土中から出土した。図示する李朝陶器2624、染付2426のほかに瓦質で円形平底の容器、備前系褐細片、燻しが加えられる瓦等の資料が含まれる。



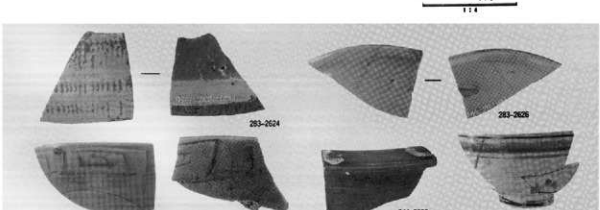


図184　遺構出土遺物（283・244・245）

石組244

A-55区に位置する。初め北半部と南半部とを別遺構と考えたが、平面図の検討の結果、両者を合わせて長方形状の区画の可能性があり、本遺構とした。石敷11、石組土壙10、石組壙242と重複し何れよりも古い。平面で、南北方向に長い長方形の辺に沿って不整な帯状に拳大の礫が積まれている。但し、西辺側は井戸などの撹乱により実際には確認できない。この構築物の短辺側の縁部ではそれを意識した構造を示している。南側の辺では石垣状に石材の小口

図165 石組244実測図

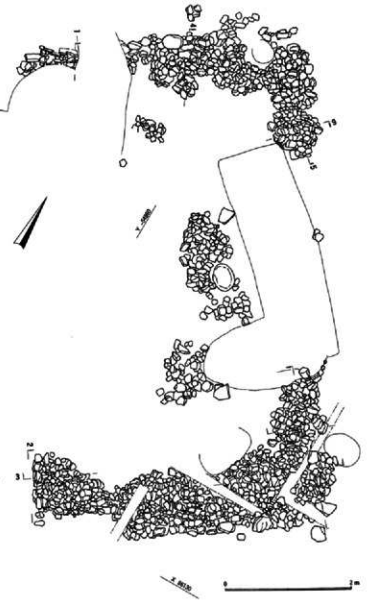


図166 遺構244全景(南から)

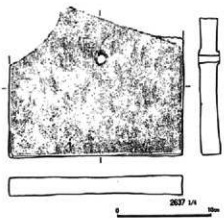


図167　遺構244出土遺物実測図

しれない。

出土遺物　上述の構築材としての瓦磚は別として、礫に混じって少量だが遺物が出土した。そのうち2/3が糸切底の土師器の細片あるいは小破片の資料である。その外は、図164に示す以外に瓦質の大形容器、土師質の鍋、備前形の擂鉢等を含んでいる。図164の2630・2629・2674は糸切底の土師器である。2630の口縁端部には黒褐色の付着物が断続している。2635は天目釉の碗、2731は白磁碗である。2627・2628・2636は青磁碗である。2633は陶器壺、2632は備前系陶器擂鉢である。図167は、土留め状の構造物に用いられていた瓦磚である。全体の半ばを欠く資料であろう。厚い板状を呈し、目釘穴を中心と考えれば長さ30cmを復原でき、幅27.5cm、厚さ2.8cmを測ることができる。

を揃えて3段ほど積み上げている。これは、遺構の南西の隅部で一部撹乱により崩落しているものの西側の長辺部にも長さ1m程続いている（図165・168）。それに対して北側の短辺部では、そのような構造はみられず、西半部で瓦磚を縦に埋め込んで土留め状の構造物としていることに注意される。また、これらの構造物で囲まれた内側は、南北辺の状況からすると、周囲より一段高くなっていた可能性は十分考えることができよう。調査時の所見からすれば、遺構244は後に黄褐色粘質土下に埋め込まれている。この時に内部の構造が破壊、削平されたことが考えられよう。南辺西端部の崩落では、その前面に構築材と思われる礫が散乱した状態がみてとれ、この時の行為を表しているのかも

図168　石組244
上　南辺部の状況（南から）
下　南西隅部の状況（北から）

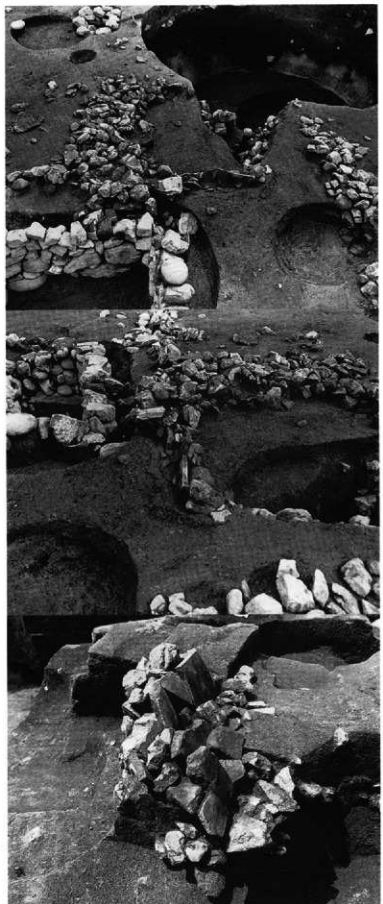


図169　石組244北辺部（北から）

図170　石組244北辺部（西から）

図171　石組244北辺部断面（東から）

石組245

A-64区に位置する。井戸227と重複しそれより新しい。覆土が井戸覆土と同様黒褐色砂であることから掘型は判然としないが、下半部の状況から、平面では不整な楕円形状、断面では不整な鉢状と観察された。掘型底部に枕大の分厚い石材を平行して立て、その上に板石を載せて空間を造っている。

図173　石組245（西から）

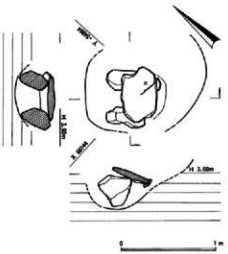


図172　石組245実測図

この部分は空隙のまま残っていたものと見え、浸水により黒色粘土が生成している。遺物は小量出土した。図164に染付碗2638、軒平瓦2639を図示することができる。

石組487

A-64区に位置する。枕大の石材を「コ」の字状に配している。その内側を埋めるように粘土塊が広がっている。粘土の下位には木炭の層がある。石組み部材の内側は被熱したように赤化が顕著である。粘土は石材の囲んでいない部分ではより広く広がり、下位の皿状の断面をもつ土壙を埋めている。遺物は確認できなかった。

図175　石組487（西から）

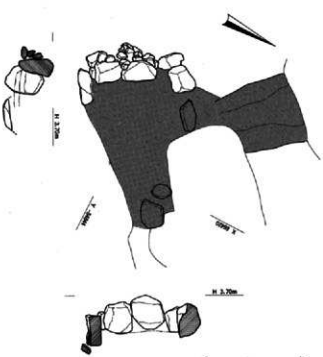


図174　石組487実測図

遺構358

A-54区に位置する。上位の土壙、井戸などの調査中に、遺構の壁に焼土、灰混りの薄層が堆積している状態の断面が現れた。さらにそれらの一部には焼け面も挟んでいた。そこでトレンチを新たに設け、断面の観察をおこないながら調査を進めた。

結果として遺構358は、明確な範囲をもった遺構ではなく、重複する遺構により撹乱を受けて、3m×1.5mの範囲に遺存する、層位的に上下して残された焼け面と、下位の焼け面と同層準から掘り込まれた段落ちに堆積した灰層を構成単位としてもつ遺構であると捉えることができよう。

遺構358は、石敷225と重複し、それよりも古い。また、石組244とは土層断面の観察から同時の遺構である可能性が考えられる。上面の焼け

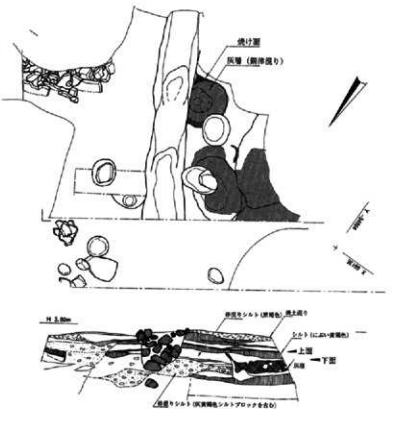


図178　遺構358実測図

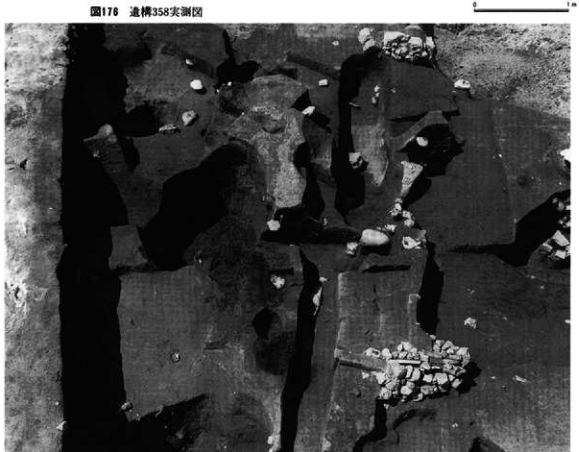


図177　遺構358（南から）

図178　遺構358下面検出状況（西から）

図179　遺構358下面掘りあげ後（西から）

面が殻る砂混りの黒褐色シルト層が、遺構244の裾部から堆積の始まっているように観察されたことによる。

第1面調査終了後の掘り下げ中、円形に残る焼け面を検出した。焼け面は断面皿状の窪みを成しており、底面に沿うように灰層、軟質粒状の木炭層、更に焼け面、灰層の順に堆積しており、それが平面では同心円状の変化となって現れている。木炭層中には粒状の銅を顕著に含んでいた。上位の焼け面とする。下位の焼け面は、さらに0.1m下げた位置にある。径0.5m程の円形を成す焼け面の中央は窪み、木炭が詰まっている。同様な焼け面が複数箇所あるが、他遺構との重複等により、明確にすることができなかった。また、この面から掘り込みが行なわれて、そこには粒状の銅を顕著に含む木炭の層が0.1m程の厚さで堆積している。また、これに接して浅い皿状の窪みがあり、同様に木炭層で埋まっていた。このことから、焼け面は銅の鋳造のための溶解炉底の一部、掘り込みはそれからの廃滓投棄のための施設であった可能性を考えることができようか。因みに下位の焼け目から更に0.1m下位の面に広がる薄層は、遠藤喜代志氏から、真土である可能性が考えられるという指摘を受けた。

出土遺物　銅滓と思われる粒状の銅のほかに少量の遺物が出土している。図189に示す2640は青磁碗である。

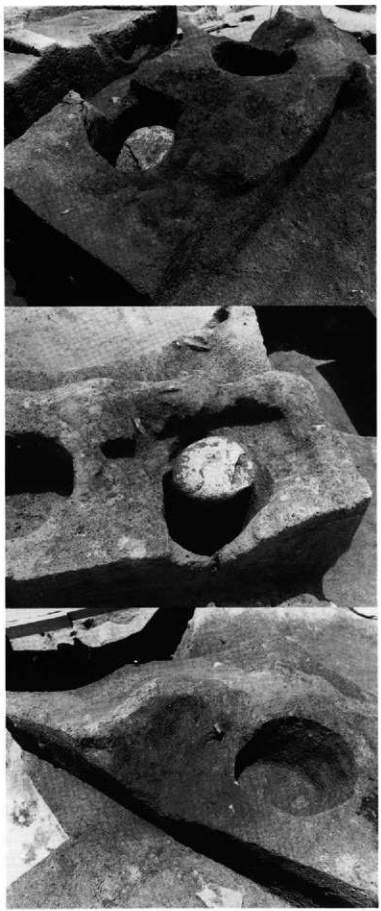
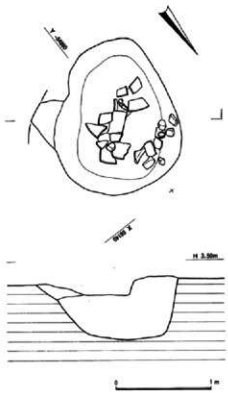


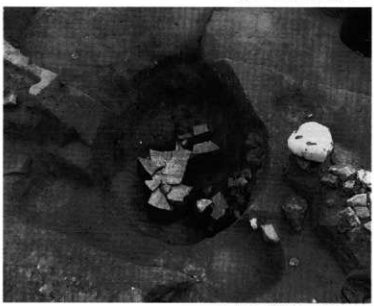
図180　遺構358下面
上　灰層（北から）
中　灰層除去後（東から）
下　焼け面（東から）

土壙354

A-54区に位置する。不整な楕円形状の土壙である。土壙底面から一括投棄された状態で備前系の甕が破片で出土した

図181　土壙354実測図 ▶



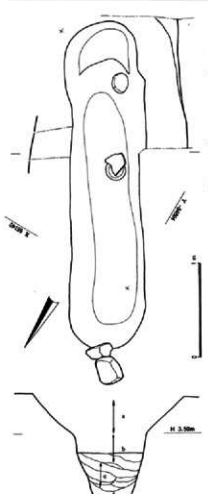


▲ 図182　土壙354（南から）

ほかに少量の遺物が出土した。図189に示す2643・2647は糸切底土師器、2642・2644・2646・2645は陶器壷、2705は備前系甕である。

土壙355

A-54区に位置する。細長い楕円形状の土壙で、底面に柱穴の根石のように礫が並んでいる。コンテナ1/10程の量出土した遺物のうち、図189に示すのは、染付2642、備前系擂鉢2649である。



a. シルト混り砂（黒褐色）。シルト塊顕著。
b. シルト混り砂（黒褐色）。軟質。
c. 粘土砂と黒褐色砂との互層。
d. シルト混り砂（暗褐色）。軟質。

図183　土壙355実測図

図184　土壙355（南から）

土壙386

A-55区に位置する。平面形が隅丸長方形状、断面形が屈曲する逆台形状を呈す。長さ2.0m、幅1.6m、深さ1.5mを測る。

遺物は覆土中から散漫にコンテナ1/10程の分量が出土した。図189に図示するのは、糸切底の土師器2655～2667、青磁碗2652、陶器壷2654、同じく盤2653、備前系擂鉢2651である。

図186　土壙386（西から）

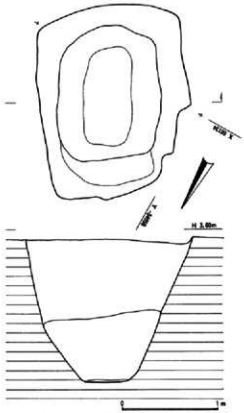


図185　土壙386実測図

土壙502

A-55区に位置する。平面形は長方形状、断面形は箱型を呈す。長さ2.0m、幅1.4m、深さ0.3mを測る。壁面には裏込めと思われる粘土が貼られており、その表面は凹凸が少ない。現状では痕跡もないが、板などが張られていた可能性がある。覆土は、灰、木炭、粘土、砂がレンズ状に堆積している。遺物は少量が覆土中から散漫に出土した。図189に示すのは、糸切底の土師器2660～2663、青磁1225・2664である。土師器2660は口縁部が大きく開く。

図188　土壙502（北から）

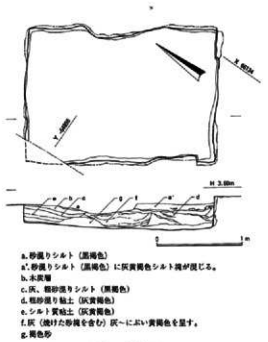
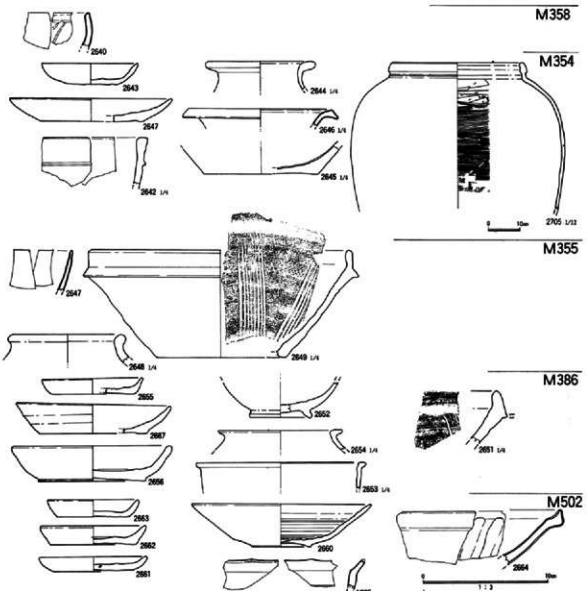


図187　土壙502実測図



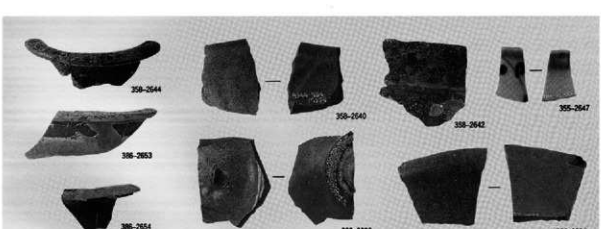


図189　遺構出土遺物（358・354・355・386・502）

II-3　第3面検出遺構

井戸596

A-54区に位置する。井戸598とする遺構と重複し、それよりも新しい遺構である。掘型は、平面では不整な楕円形状を呈し、断面形は逆台形状となる。深さ1.5mの位置で一旦段をなし、それの片側に寄って井戸側が埋設されている。掘型の長さ2.3m、幅1.7m以上で、この位置から下方には井戸側の痕跡が明確に確認できる。覆土は全体に一様な暗褐色砂である。

遺物は覆土中からコンテナ1/10程の分量が出土した。2400は糸切底の土師器、2599は白磁皿である。2398は青磁で把手付の注口かと思われる資料である。蓋の受け口もつく。釉は青灰色に発色し、半透明である。図193に示すのは、備前系擂鉢である。

井戸598

井戸596と重複してそれより古い。掘型は平面形が楕円形状を呈するものと見える。覆土は暗褐色砂で、全体に一様である。土壙状の掘型底面の一方へ寄って井戸側がある点、2基の遺構の重複しているのかもしれない。

遺物は少量が覆土中から出土した。図示する2401は青磁碗である。

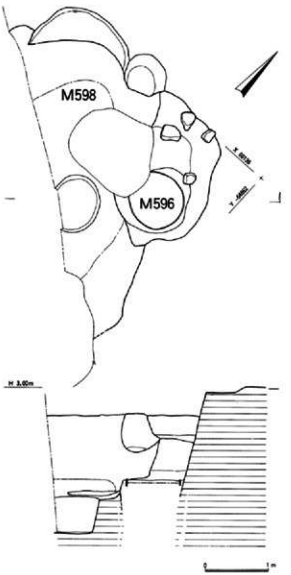


図190　井戸596・598実測図（1:40）

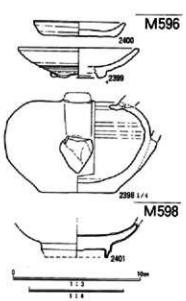


図191　井戸596・598出土遺物

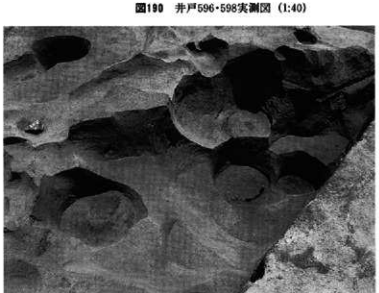
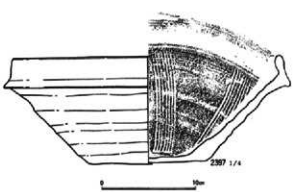


図192　井戸596・598（北から）



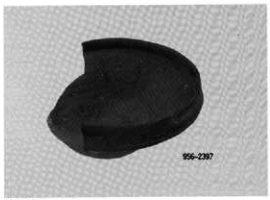


図193　井戸596出土遺物(2)

井戸600

A-55区に位置する。平面で円形状の掘型をもつ井戸である。断面形状は鉢形を呈するものである。確認面で井戸側の痕跡を検出した。覆土は上位の井戸と異なり、にぶい黄褐色砂で、地山砂層との区分が難しい。

遺物はコンテナ1/10程の量が出土した。図196に図示する2402・2403は糸切底の土師器である。2404・2405は輪羽口である。輪羽口は第3面の複数の遺構から出土しているが、本遺構の資料のみを図示する。瓦質土器には、捏鉢、擂鉢、火鉢の資料がある。

図194　井戸600（北から）

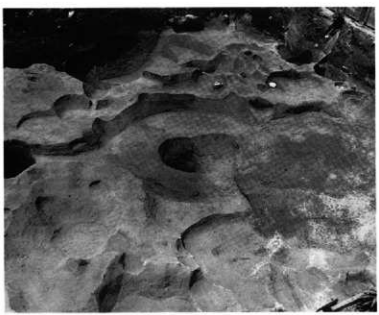


図195　井戸640（北から）

井戸640

A-64区に位置する。掘型は平面で楕円形状を呈し、中央に井戸側痕跡が確認面で検出できた。掘型の長さ3.9m、幅3.1mを測る。覆土は井戸600と同様地山砂層との識別が難しい。覆土中に粘質土の小塊が含まれることで識別することができた。

遺物はコンテナ1/10程の分量が出土している。その2/3が糸切底の土師器細片あるいは小破片の資料である。また、瓦質の捏鉢がある。陶磁器類は極少量の出土である。図196に示すのは明染付碗である。

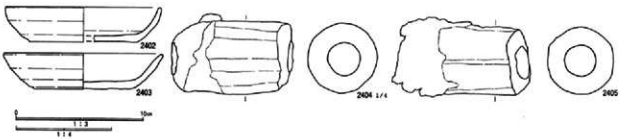


図196　井戸(600・640)出土遺物

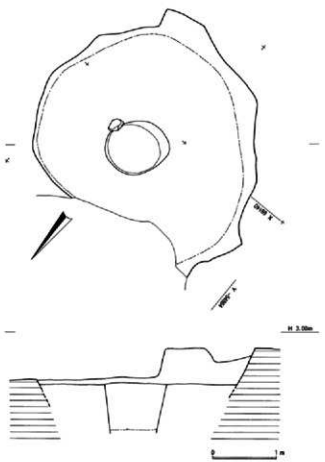


図197　井戸640実測図

井戸1050

井戸1050・1051・1052はC-43区の一か所に集中して互いに重複している。確認面ではその関係を把握できず、掘り下げの過程で順次確認していくこととなった。従って、特に上部出土の遺物については属する遺構については不明確なものがある。

井戸1050は、井戸165、井戸1051、井戸1052と重複して何れよりも新しい。掘型の平面形は不整な楕円形状を呈し、下半部で傾斜が急になる深い鉢状を呈す。掘型の中位の片側に段がある。平面の規模は、長さ3.8m、幅は井戸165に切られるため現状で2.6m、深さは、段までが1.5m、涌水点までが2.7mを測る。涌水点は他遺構と同様標高0.5mの位置にある。井戸側は桶形の木製品である。

出土遺物　遺物は掘型埋土、井戸側覆土から総量でコンテナ1/10程の分量が出土した。図235中、瓦質の風炉2410は大破片の資料であり、器表の遺存状況も極良好である。2407は糸切底の土師器である。2408は青磁碗である。このほかに、土師質鍋、瓦質擂鉢、備前系擂鉢の資料が含まれている。

井戸1051

井戸1050よりは古く、井戸1052と重複してそれよりも新しい。井戸1050同様中位に段をもつ掘型であり、規模も良く似ている。井戸側の痕跡はその段の位置では確認できている。井戸側は桶形木製品である。

出土遺物　掘型、井戸側内から少量の遺物が出土した。いずれも細片あるいは小破片の資料である。

糸切底の土師器、瓦質擂鉢、土師質火鉢、輸入陶磁器のほかに輪羽口の資料がある。

井戸1052

井戸1051と重複し、それよりも古い。構造は井戸側も含め、井戸1051、1050と同様のものである。遺物は極少量が出土している。糸切底の土師器細片資料である。

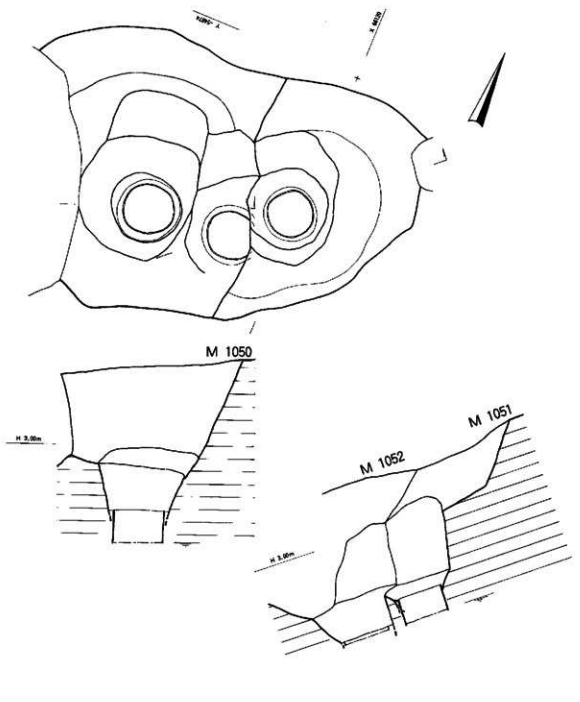


図198　井戸1050・1051・1052実測図

土器埋置679

C-43区に位置する。径0.6m程の平面円形状の土壙内へ陶器壷を直立させて埋置したものである。土壙の深さは0.5m程である。覆土は黒褐色で粘質のある砂で、口縁上も覆っていた。壷の内には土砂は入り込んでいないので、木製の蓋なりがあったはずであるが、痕跡等確認することはできなかった。埋置されていたのは、褐色釉の陶器四耳壷で完存する。器高は48cm、胴部で最大径50cmを測る。

図200　土器埋置（東から）

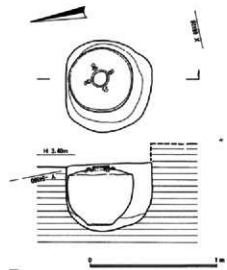


図199　土器埋置679実測図

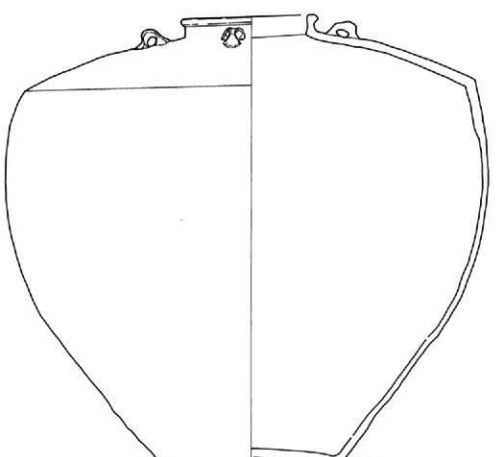


図201　土器埋置679出土遺物

土壙352

A-55区に位置する。平面では楕円形状を呈する土壙である。断面は逆台形状を呈し、長さ2.2m、幅1.2m、深さ0.4mをそれぞれ測る。覆土は全体に一様な黒褐色の砂である。

出土遺物　遺物は覆土中から総量でコンテナ1/10ほどの分量が出土した。糸切底の土師器の細片あるいは小破片の資料が半ばを占める。青磁、白磁の細片のほかに朝鮮半島産とおもわれる緑褐色の釉が掛かる瓶の個体資料と思われるまとまった数の破片資料がある。瓦質土器には擂鉢、捏鉢、土師質土器には鍋がある。備前系の擂鉢細片資料も混じる。図示する2492～2494は何れも糸切底の土師器である。また、輪羽口の資料も含まれる。

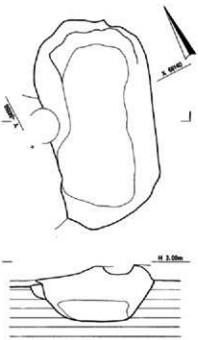


図202　土壙352実測図（1:40）

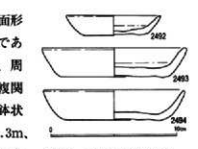


図203　土壙352出土遺物

土壙400

B-34区に位置する。平面形が楕円形状を呈する土壙である。今回報告しないが、周囲の楕円形状の土壙と重複関係にある。断面形は深い鉢状を呈する。長さ2.1m、幅1.3m、深さ1.0mを測る。覆土は上部はシルト塊混りの暗褐色砂、以下、粗砂混りの黒褐色砂、地山砂層の崩落層の順で堆積している。

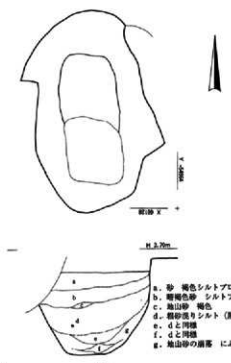


図204　土壙400実測図（1:40）

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に少量出土した。全体の2/3は糸切底の土師器の細片あるいは小破片資料である。陶磁器は、鎌倉期以降の白磁、青磁が混じるなかに朝鮮半島製の青磁壺、明染付とみられる資料が含まれる。瓦質土器では火鉢、擂鉢の資料があるが、何れも細片である。

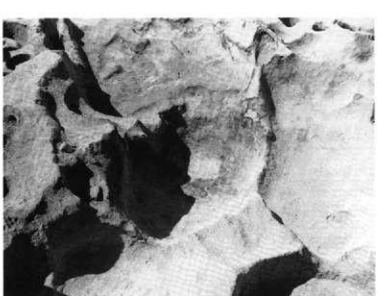


図205　土壙400（南から）

土壙407

B-54区に位置する。平面形が楕円形状の土壙である。断面形は逆台形状を呈する。重複する遺構により一部を欠くが、長さは現状で1.1m、幅1.0m、深さは0.6mを測る。重複する他の遺構との前後関係は確認できなかった。

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に少量出土した。4/5は糸切底の土師器の資料である。細片或いは小破片の資料が殆どである。瓦質土器では擂鉢の細片資料がある。図示する2507～2509は何れも糸切底の土師器である。

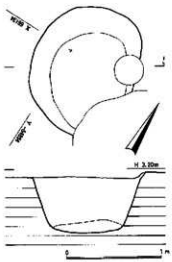


図207　土壙479実測図

土壙479

A-55区に位置する。平面形が楕円形状を呈し、断面形は逆台形状を呈する土壙である。長さ1.4m、幅1.1m、深さ0.6mを測る。

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に少量が出土した。4/5は糸切底の土師器の資料である。細片或いは小破片の資料が殆どである。小形の陶磁器は図示する他に白磁碗の細片資料がある。図示する2503は天目釉陶器碗である。2504は青磁碗の資料である。また、須恵質の捏鉢、瓦質の擂鉢が含まれている。輔羽山の資料がある。

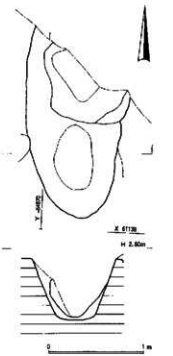


図206　土壙407実測図

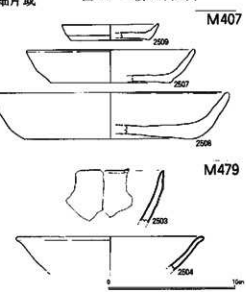


図208　土壙407・479出土遺物

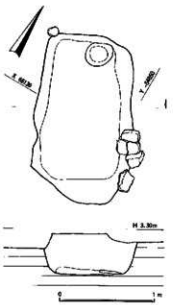


図209　土壙499実測図

土壙499

A-55区に位置する。平面形が不整な楕円形状を呈する土壙である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は黒褐色砂である。

出土遺物　遺物は覆土の全体から出土した。総量でコンテナ1/10ほどの分量となる。その1/2は糸切底の土師器の細片ないし小破片の資料で、坏形土器が顕著である。土師質土器には擂鉢、鍋がある。瓦質土器には擂鉢がある。陶磁器には白磁、青磁の碗あるいは盤が含まれている。陶器には瓶とみられる資料がある。図222に示すのは、糸切底の土師器2499・2500・2501、青磁2498・2502である。

土壙500

A-55区に位置する。両側を上位の遺構による撹乱を受け、一部が遺存する土壙である。現状からすると平面形が楕円形状を呈していたものと考えられる。長さ1.5m、深さ0.3m程の大きさである。覆土の中位で糸切底の土師器が一括投棄されたような状態で出土した。

出土遺物　図222に一括出土した糸切底の土師器を示す。口径に

図211　土壙500（西から）

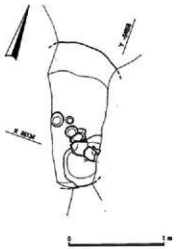


図210　土壙500実測図

より、2群がある。2354・2356・2358は、口径が8～9cmの値を取る。2355・2359・2362・2361・2352・2360・2363・2357は口径が12～13cmの値を取る。

土壙503

A-55区に位置する。重複して新しい遺構の撹乱を受けるため、形状規模が不明確であるが、現状から平面形が不整な楕円形状を呈し、深い皿状の断面形であるとでき、現状での長さは1.0mとなる。幅は1.0m、深さは0.2mを測る。土壙の片側に寄った覆土の上部で、糸切底

図213　土壙503（北から）

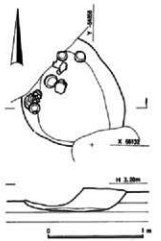


図212　土壙503実測図

の土師器が一括投棄された状態で出土したほかに覆土中から散漫に遺物が出土した。

出土遺物　一括出土した糸切底の土師器は2群がある。口径が8cmとなる2450、口径が12～13cmとなる2454・2451・2453・2452である。このほかに瓦質土器捏鉢の細片が出土した。

土壙513

A-55区に位置する。他の遺構と重複するため、形状が不明確であるが、現状から平面形が不整な四辺形状を呈するものと復原できる。現状で長さ1.2m、幅1.0m、深さは遺存状態の良好な部分では0.5mを測り、断面形は箱型となる。覆土の上部で遺物が一括投棄

図215　土壙513（西から）

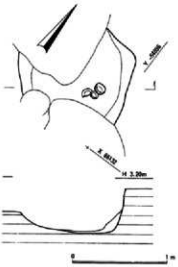


図214　土壙513実測図

された状態で出土した。

出土遺物　一括出土したのは何れも糸切底の土師器である。2群がある。口径8cmの2351と口径12cm超の2349・2350とを図222に示す。

土壙582

A-55区に位置する。第2面で調査した構238の下位に位置する。平面形は不整な円形状を呈す。断面形は逆台形状を呈し、下半部の傾斜が急である。径1.4m、深さ1.0mを測る。覆土は全体に一様な明褐色砂で、下半部では一方から暗黄褐色砂が流れ込んだような状態で挟まれている。人為的な埋め立てを考えられようか。

出土遺物　遺物は少量が覆土中から散漫に出土した。図222に

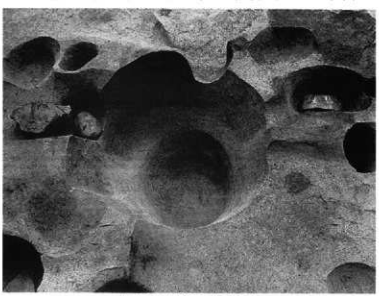


図217　土壙582（西から）

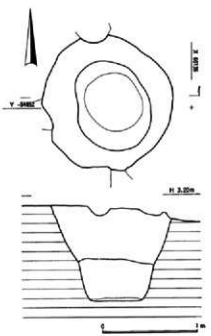


図216　土壙582実測図

糸切底の土師器2348、天目釉陶器碗2506を示す。

土壙595

A-55区に位置する。平面形が不整な四辺形状の土壙である。断面形は中程で屈曲する逆台形状を呈する。長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.7mをそれぞれ測る。

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に極少量が出土した。図222に示すのは青磁碗の上半部の資料2505である。口縁部外面に雷文が施されている。これのほかに糸切底の土師器細片、燻しを施す瓦細片が出土した。

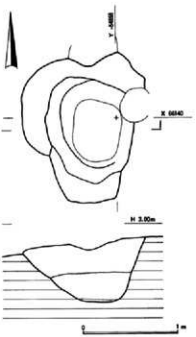


図218　土壙595実測図

図219　土壙608（東から）

土壙608

A-55区に位置する。平面形は不整な四辺形状を、断面形は逆台形状を呈す土壙である。長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.6mを測る。本遺構で注意されるのは、底面の遺構主軸に沿って長さ15cmから30cm程の平らな礫を一列に配していることである。何らかの支持のためかと思われるが、調査中にその痕跡を確認することはできなかった。

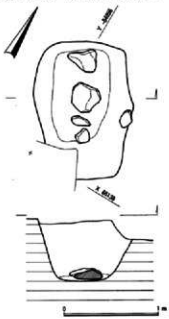


図220　土壙608実測図

出土遺物　遺物はコンテナ1/10ほどの分量が、覆土中から散漫に出土した。その4/5は糸切底の土師器の細片あるいは小破片資料である。図222に示すのは白磁碗2496である。ほかに、丸瓦、瓦質土器の擂鉢が何れも細片資料として出土している。

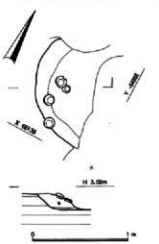
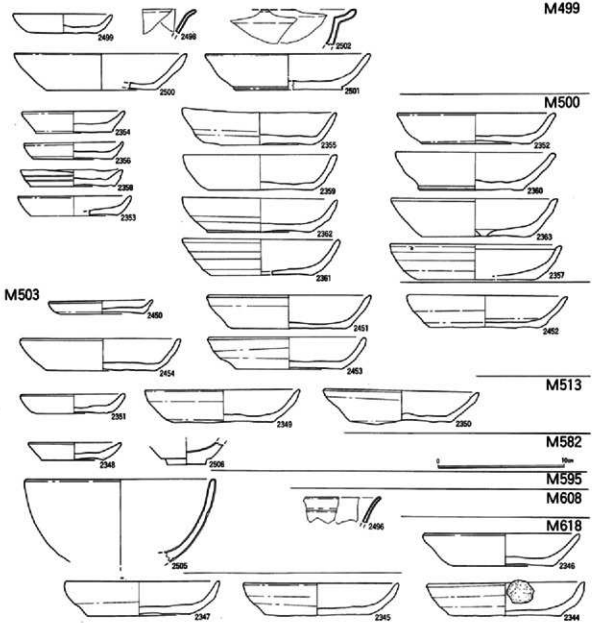


図221　土壙618実測図

土壙618

A-65区に位置する。底面が浅い位置にあるため、遺存状態が不良である。為に、重複する位置にある土壙608との新旧関係は不明である。覆土の上部から一括投棄されたような状態で糸切底の土師器が出土した。

出土遺物　図222に、一括出土の土器2347・2345・2346・2344を示す。



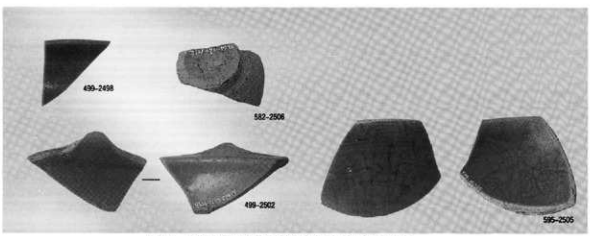


図222　土壙 499・500・503・513・582・595・618出土遺物

土壙729

E-22区に位置する。第3面の項で報告するが、確認、調査面は第1面である。ここで訂正する。本遺構の平面形は円形状を呈し、断面形は箱型を呈す。径1.2m、深さ0.7mをそれぞれ測る。覆土は、明灰褐色の砂である。

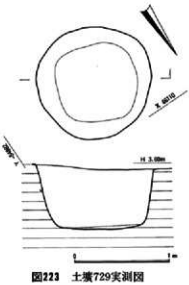


図223　土壙729実測図

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に出土した。後述する銅製品を除くと極少量の出土である。図示する2704は青磁碗、2703は青磁皿である。内底面の釉を掻き取っている。2702は鋳銅製の、薬罐とでもいうべき形態の、完存する資料である。把手部を鋲で本体に取り付ける。受部は別作りであったものが様式化の結果一体として鋳造されている。把手には樹皮あるいは蔓を巻き付けた痕跡が残る。体部の径21.5cm、器高13.5cmをそれぞれ測る。

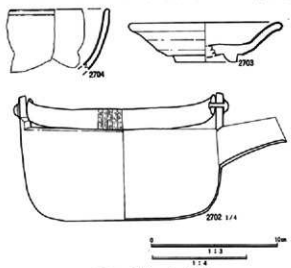


図224　土壙729出土遺物

土壙782

D-22区に位置する。平面形が長方形状で、断面形は箱型を呈する土壙である。長さ1.6m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。長辺側の一部では遺構壁に沿って木枠の痕跡が残っていた。覆土は灰色のシルト質粘土と灰色砂との互層である。形状から木棺も考えたが、釘などの出土もなく、覆土の堆積状態から、開放されての利用が推測されよう。

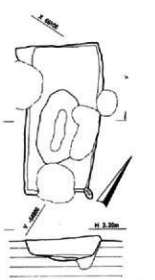


図225　土壙782実測図

図226　土壙782（東から）

出土遺物　覆土中から少量出土した。図227に示す。糸切底の土師器は2340・2342・2343・2341と2339の2群がある。2495は象嵌のある青磁である。

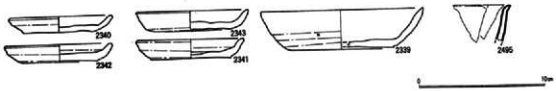


図227　土壙782出土遺物

土壙839

F-33区に位置する。掘り下げ途中、遺物の出土によりそれと確認した。調査時の所見からすると長さ1.3m、幅0.7m程の平面形が楕円形状を呈する遺構である。覆土は黒褐色砂である。覆土中に糸切底の土師器が一括投棄されたような状態で出土した。

出土遺物　上述のような状態でコンテナ2/3程の糸切底の土師器が出土した。口径により大小の2群がある。口径が8cm付近の値をとる一群(2419～2427)と同じく12～13cmの一群(2428～2449)とである。

図228　土壙839（東から）

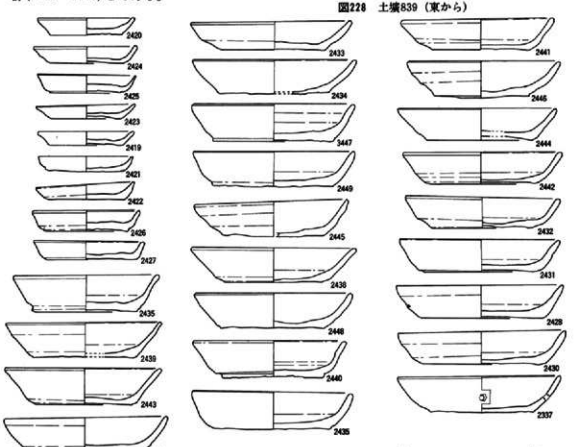


図229　土壙839出土遺物

土壙910

F-44区に位置する。平面形が不整な楕円形状の土壙である。断面形は逆台形状を呈する。長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.6mを測る。覆土は黒褐色の砂であり、全体に一様である。

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に小量出土した。2/3は糸切底の土師器細片あるいは小破片の資料である。2335・2336を図示する。2336は口縁が大きく開き、水挽きの痕跡が顕著に残る資料である。陶磁器は図示する2490のほかに天目釉の資料、青磁、黒色釉の瓶の細片資料がある。2490は染付碗の細片で、内外面に圏線を描く。土師質土器には湯釜がある。2337は体部の小破片で、外面は篦削き調整が、内面は刷毛目調整が行なわれている。釣り手の孔には吊り下げのための部材であろうか木質が炭化して遺存する。2338は風炉の上半部破片資料である。口縁部径26.2cmの瓦質土器である。口縁部の内面は剝落し、肩以下の内面に指押さえによる調整がおこなわれ、この部分では煤状の付着物が見られる。

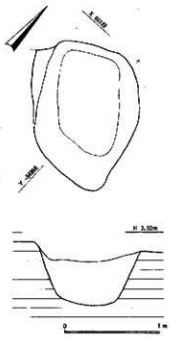


図230　土壙910実測図

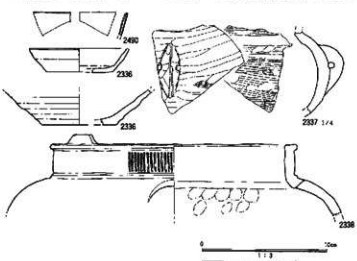


図231　土壙910出土遺物

土壙1012

E-22区に位置する。半ばを基礎杭により攪乱を受けて欠失している。平面形は現状から隅丸方形状の土壙と考えられる。一辺の長さは1.0mほどで、断面形は逆台形状を呈し、深さは0.4mを測る。

出土遺物　遺物は覆土中から散漫に出土し、総量ではコンテナ1/10程の分量となる。その4/5は糸切底の土師器で、殆どが細片あるいは小破片の資料である。図化するのは2330と高台の付く2331である。いずれも内面側の口縁端部にタール状の付着物が残っている。灯明皿としての使用によるものであろうか。2332は瓦質の火鉢である。陶磁器類は痕跡程度であるが、天目釉、白磁資料が出土している。

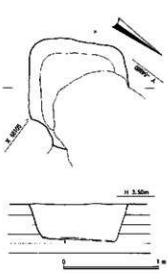


図232　土壙1012実測図

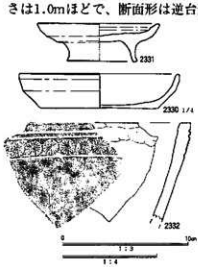


図233　土壙1012出土遺物

遺構1079

A区の埋め戻し時、確認のため機力での深掘りに際し掘り上げた砂中から白磁碗が一括出土し、遺構の遺存が推測されたものである。この時点で精査を試みたが、遺構の形状、規模とも全く掴むことができなかった。また、遺物がどの様な関係をもって遺存していたかも不明である。

出土遺物　白磁碗は、何れも本来完存する資料であり、機力により掘り上げた時点で破損したものであると観察される。白磁碗は4点出土した。遺物2273・2274・2275・2276は同一型式の資料である。口径は17～18cmの付近にある。器高は6～7cmにある。底径は6cmを前後する。釉は口縁部から2/3の位置まで掛けられている。内面の底面近くに1圏線をもつ。これら以外に褐緑色釉の短頸壺破片が伴う可能性がある。

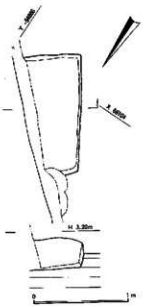


図234　土壙1080実測図

土壙1080

D-22区に位置する。土壙782の主軸に沿い、土壙782から0.5m離れた位置にある。土壙782と同様平面形が長方形状を呈するものと見えるが、半ばは調査区外にかかっている。長さは1.3m、幅は不明である。断面形は箱型をなし、深さは0.2mほどである。覆土は白色砂と黒褐色砂の互層である。

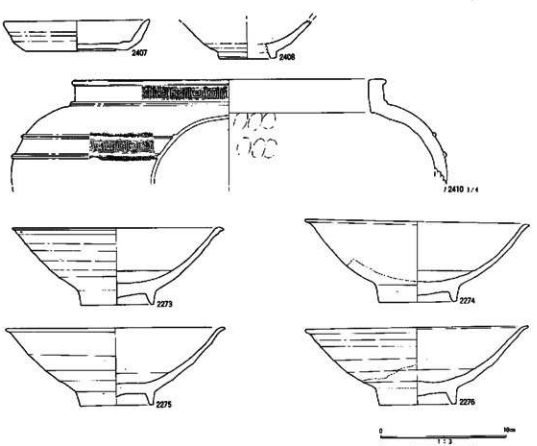


図235　遺構1050・1079出土遺物

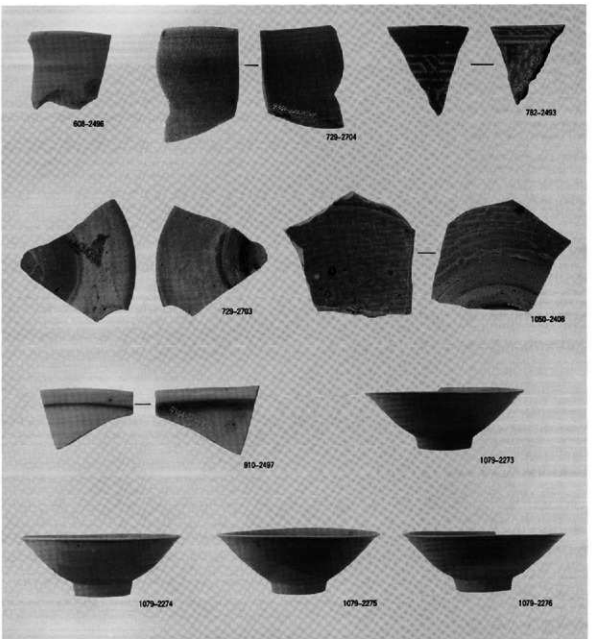
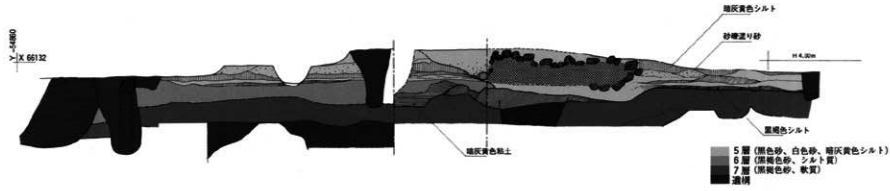
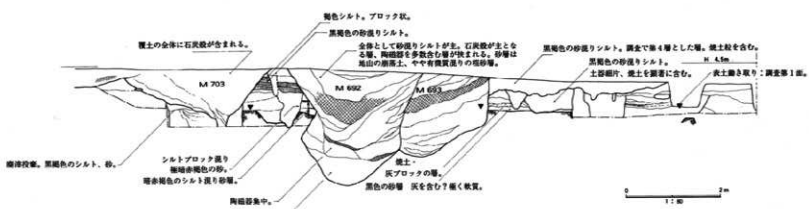

606-2496
729-2704
782-2493
729-2703
1050-2406
910-2497
1079-2273
1079-2274
1079-2275
1079-2276

図236　遺構出土遺物



A-55区　土層断面図　X=66132



D区　南壁土層断面図
（調査区中軸線方向）

図237　調査区土層断面図

第Ⅲ章　おわりに

以上、博多第83次地点遺跡について、主要な遺構とその出土遺物についてのみの報告となった。

本調査出土資料について、考察を加えるほどの検討をおこなっているわけではないが、調査中、あるいは報告書作成中に気づいた点について、以下に略記する。

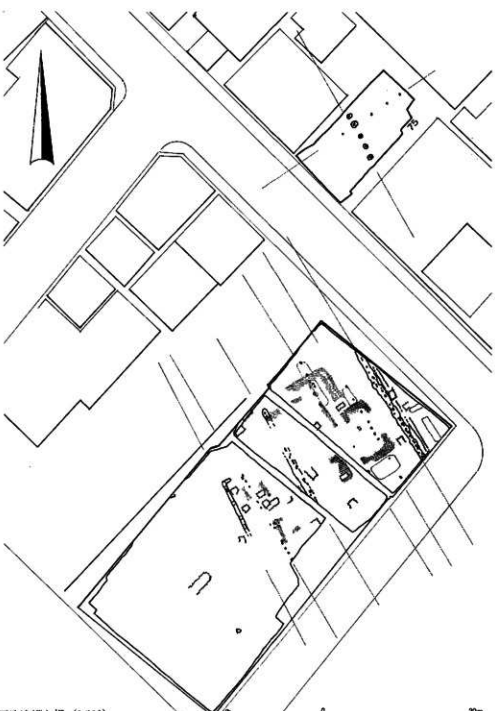


図238　石造遺構と櫓（1:500）

調査第1面、第2面では石造の遺構が多数出土した。それは、形状から遺構の軸あるいは面が指す方向を比較的捉えやすい。その方向は、大きく見ると、調査区東側の街路の方向から15度程西へ振れて、北から35度前後西へ振れた方向に沿うか、あるいは直交する方向に構築されている。遺構の時期の幅を考えると、その使用が戦国時代から江戸時代の前半期までの幅を考えられる。また、細長い長方形状を呈するものなど形状が比較的幾何学的に整った土壙も同様な傾向を示すのではないかと観察される。ところで、今回調査では、柵238、柵182など複数列の柵を検出、調査したが、これも同様に上記方向に沿ったように設けられたものとみえる。このような点に注意して、平面図を検討してみると、根石をもつ柱穴、あるい柱穴の根石とみられる礫が分布する中で、不規則な、あるいは断続する部分もあるが、この方向に沿う配列のあることが見て取れる。以上を図238に表示する。調査現場で柵とした遺構以外に、上述の基準で柵列と推定するa～dを認めた。これを1/200平面図上で計測する。柵238と柵aとの間隔は3.8m、柵aと柵bとの間隔は3.5m、柵bと柵cとの間隔は両者の間が平行しないため、調査区北壁際で7.5m、南壁際で8.1mとなる。さらに柵cと柵dとの間隔は平行しており、6.7mを測る。柵dと柵182とは明らかに平行しておらず、遠存する部分の北端で2.2m、南端では3.3mの値となる。柵182と柵bとを除いた柵238・a・c・dは正しく平行しているといえよう。

本地点でえた情況を隣接調査地点に及ぼすと、図上での操作からは、第75次地点における柵78(SA-78)と、これら柵列が平行するものと判断される。さらに第55次地点の建物の側柱列とされる柱列、第69次地点の柵(SA-40)等が同様の構造をもったものかと観察されるが、その方向は南北方向である点では同様であるが、その角度は一致しない。平面図上に編集して検討する必要があるが、測量基準点設置以前であったこと等により、精度上の問題が残されている。

以上、柵についてのみ触れた。これらの柵が同時に設置されていたか否かは現状では判断できないが、可能性として、短冊状の地割を想定することもできよう。

博　多　54

福岡市埋蔵文化財調査報告書第503集

1997年(平成9年)3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　株式会社ミドリ印刷
福岡市博多区西月隈1丁目122-4